

通訳教育研究および教育書の文献案内

通訳教育指導法研究プロジェクト(2011～2013 年度)

◆通訳教育指導法研究プロジェクト代表者挨拶

月日の経つのは早いもので、2014 年 4 月に当時の通訳教育指導法研究プロジェクト・チームが『通訳教育論集』を発行してもう 2 年以上が過ぎました。このプロジェクト・チームは、旧通訳教育分科会のメンバーが 2011 年の日本通訳翻訳学会年次大会において新プロジェクトの立ち上げと新メンバーの募集を行い、通訳教育、しかもその指導法に特化した新たなプロジェクトとして発足したという経緯があります。その後、各自の研究成果を年 2～3 回のペースで発表し合い研究の発展と深化に努めるとともに、学会外からもゲストをお呼びして勉強会を行うなどの活動を続けました。すべての研究発表会や講演会は一般公開としました。最終的にプロジェクト解散のタイミングに合わせてこれまでの研究成果を印刷媒体で『通訳教育論集』として発行するに至りました。

『通訳教育論集』は 2 つのパートからなります。前半はチームメンバーから投稿された多様な切り口による研究論文で、後半は河原清志氏のリードのもとで「通訳教育研究文献集成」サブチームが地道にかつ緻密に収集した内外の通訳教育に関わる文献案内で構成されています。特に文献集成案内の冒頭に鳥飼玖美子・元会長による特別寄稿（総括）および水野的・現会長、南津佳広氏、長沼美香子・元理事による特別寄稿が加わったことで論集の価値が高まりました。

「通訳教育研究集成」については成果をウェブで公開することとしておりました。そこで、論集の発行より 2 年半が経過したこの時期に、最新の情報を若干追加したものを、ウェブジャーナル『通訳翻訳研究への招待』に掲載して頂くことになりました。情報の追加にご協力頂いたのは、水野的・現会長、石原知英・現理事、河原清志・現副会長です。

旧通訳教育指導法研究プロジェクトメンバーの皆様には以下にお名前を記すことで、感謝の意を表させていただきます。

[コアメンバー] (敬称略)

石黒弓美子・稲生衣代・河原清志・新崎隆子・内藤稔・西村友美・中村幸子
友野百枝 (2011～2012 年)

[メンバー]

飯塚秀樹・関口智子・松縄順子・宮元友之

2016 年秋

通訳教育指導法研究プロジェクト (2011～2013 年度) 代表・中村幸子

※以下の所属表記は 2013 年秋のものである。

◆通訳教育研究文献集成について

通訳教育関連の文献を整理し、その情報を共有することは、今後の通訳教育研究ならびに現場の通訳教育の発展にとり、大変有意義なことと思われる。

現在、大学・大学院における通訳教育は、主に3つに分類される。実施されている学年とともに記すと、以下のようになる。

- | | |
|-------------------|---------------|
| (a) 英語（外国語）教育への応用 | 学部1・2年次 |
| (b) 通訳スキルの養成 | 学部3・4年次、(大学院) |
| (c) 通訳者の養成 | 大学院 |

また、通訳能力（英日語の場合）を下位分類すると、主に以下の6つに分けられると想定される。

- | |
|--|
| ①英語・日本語の文法能力・談話編成能力などの言語運用能力 |
| ②英語圏・日本語圏の両文化に関する豊かな知識と両文化の違いに柔軟に対応できる能力 |
| ③英語・日本語を双方向で瞬時に口頭ないし書面で翻訳できる訳出能力 |
| ④講演・国際会議・テレビニュース・論文・報告書・技術的な文書など高度に知的な内容を多分野にわたって深く理解できる能力 |
| ⑤通訳・翻訳に必要な専門的な情報を収集・調査・整理する能力 |
| ⑥通訳現場で状況を的確に判断して訳出し、コミュニケーションの調整と仲介を行う能力 |

そこで、本サブ・プロジェクトにおいては、上記②⑥を加味した異文化コミュニケーション論の視点、多文化社会論の視点、そして近年、社会的意義が増してきたコミュニティ通訳の視点を踏まえ、以下の構成で通訳教育研究の文献集成を行った。

- | | |
|----------------------|--------|
| (a) 英語（外国語）教育への応用 | ①② |
| (b) 通訳スキルの養成 | ①②③④⑤⑥ |
| (c) 通訳者の養成 | ②③④⑤⑥ |
| (d) 異文化コミュニケーション論の視点 | ②⑥ |
| (e) 多文化社会論の視点 | ②⑥ |
| (f) コミュニティ通訳の視点 | ②④⑤⑥ |
| (g) 対人コミュニケーション論の視点 | ⑥ |
| (h) 言語処理・脳科学の視点 | ①③ |
| (i) 通訳基礎トレーニング | ①③④ |
| (j) 通訳教育評価論 | ①②③④⑥ |
| (k) 翻訳教育の視点 | ①②③④⑤ |

各項目の担当者は以下の通りである。

特別寄稿・総括

「日本における通訳教育の変遷」	鳥飼玖美子
-----------------	-------

特別寄稿

(i) 通訳教育全般、先駆け期の文献	水野的
(ii) 通訳理論研究の視点	南津佳広
(iii) 翻訳教育の視点	長沼美香子

サブ・プロジェクトメンバーによる寄稿

(a) 英語（外国語）教育への応用	西村友美・友野百枝・宮元友之
(b) 通訳スキルの養成	中村幸子
(c) 通訳者の養成	稲生衣代
(d) 異文化コミュニケーション論の視点	新崎隆子
(e) 多文化社会論の視点	山本一晴
(f) コミュニティ通訳の視点	内藤 稔
(g) 対人コミュニケーション論の視点	渡部富栄
(h) 言語処理・脳科学の視点	篠塚勝正
(i) 通訳基礎トレーニング	田中深雪
(j) 通訳教育評価論	高橋絹子
(k) 通訳教科書、教則本	中村幸子
(l) 最新情報の補足	水野的・石原知英・河原清志
* 企画・調整・文献補足	河原清志

以下で紹介する文献は、上記の各項目ごとに、年代順に並べている（但し、(j) 通訳教育評価論を除く）。年代順に文献を追うことで、通訳教育・指導法研究の発展を項目ごとに追えるようにするためである。またここでは論文、単行本など通訳教育・指導法に関連すると思われるものは可能な限り取り上げた。そして取り上げた文献は通訳教育研究が中心だが、必要に応じて通訳教則本や通訳者の現場の体験談など、通訳教育・指導法に関連するものも一部取り上げている。さらに、通訳指導に直接関連がなくても、通訳を実践したり考察したりする上で教育上有益なものは取り上げた。したがって、「通訳教育」「通訳指導」というタイトルが直接付されていない文献も多く含まれている。ただし、一部を除いて手話通訳（教育）に関する文献は扱っていない。通訳者のみならず、通訳に興味・関心を持つ方々、通訳を勉強する方々、通訳を指導・教育する方々や通訳者に通訳業務を依頼する方々、そして通訳エージェントの方々に至るまで、できるだけ多くの方々にこの文献集成をご覧頂き、通訳について理解を深めて頂ければ幸いである。

2013 年秋 通訳教育研究文献集成 代表・河原清志（金城学院大学）

※2016 年秋 論文を中心に、若干の情報を追加した（水野的・石原知英・河原清志）。

【特別寄稿・総括】

「日本における通訳教育の変遷」（鳥飼玖美子）

通訳教育研究および教育書の文献を収集するというのは誠に意義のある企てである。同時に、これは実に労の多い作業でもある。通訳教育の歴史は欧米ほど長くないだろうから日本の文献なら何とか集められるかと考えるのは早計というもので、通訳教育についての文献が予想外に古くから、かつ多く日本に存在することは、今回のプロジェクトで明らかになったといえる。

長崎通詞

通訳といえば江戸時代の長崎通詞が先達であるが、訓練についての資料は残っていないのだろうか。

唐通事や阿蘭陀通詞が世襲制であり、下は見習いの稽古通詞から最上位の大通詞、さらに目附役まで体系的な組織を有していたことはいくつもの文献で紹介されているが、いずれにも訓練内容についての詳細は見当たらない。

通事の子孫である林陸朗による『長崎唐通事—大通事林道榮とその周辺』（2000, 吉川弘文館）では、唐通事の職務内容、名跡を世襲する後継者養成・昇進コースについて、地位（役）や給与（役料）について（pp. 58-65）、「目附役」が稽古通事に中国語会話や学芸などを指導したこと（p.110）などが説明されているが、具体的な通訳訓練については記述がない。

今村源右衛門は、日本に密入国したイタリア人宣教師シドッチの尋問で通訳をつとめた阿蘭陀通詞であり、片桐一男が『阿蘭陀通詞 今村源右衛門英生』（1995, 丸善）で、その生涯を紹介している。副題に「外^と国^{くに}の言葉をわがものとして」とあるように、大通詞としてシドッチを尋問した源右衛門はオランダ語習得のみならず、未知の外国語と苦闘した。オランダ商館長からシドッチとの「談話が何国の言葉で行なわれたか」と質問され、「何国語ともつかぬ言葉であった」と答えたくらいである。シドッチは主としてイタリア語とポルトガル語に日本語を混ぜたようだが、その日本語は「到底諒解し難い片言に過ぎないのであった」という（p. 93）。オランダ商館補助員がラテン語を少し理解するというので手伝ってもらい、長崎奉行所は、通詞に対するラテン語教授を依頼する。連日の特訓を経て、やがて源右衛門は稽古通詞2名を伴い、江戸へ行き、新井白石による4回にわたる尋問¹の通訳をつとめる。習いたてのラテン語で四苦八苦する様子は、白石が『西洋紀聞』としてまとめた中で描写されている。

片桐の書では、稽古通詞採用の様子が紹介されている。1695年、出島のカピタン部屋でのオランダ語試験には、長崎奉行、医師一人、新旧商館長と館員、外科医、大小通詞が立

¹ 『西洋紀聞』としてまとめられている。cf. 新井白石・・村岡典嗣（1936）『西洋紀聞』岩波文庫、新井白石・宮崎道生（1968）『西洋紀聞』東洋文庫、新井白石・大岡勝義・飯盛宏（1980）『西洋紀聞—原本現代訳（61）』教育社新書。

ち会い、「オランダ語の会話と外科科学についての通弁」が試験内容であった。受験者の中から選ばれた源右衛門が稽古通詞に任命されたとある (pp. 77-80)。

著者の片桐によれば、阿蘭陀通詞の職は「世襲の要素をもつと同時に、言葉が出来るか、出来ないか、という1点にかかった技能職」である。そうだとすれば、多くの研究書で、専門とする外国語(特にオランダ語)を習得する方法についての記述が大半であることは、自然なことなのかもしれない。

唐通事は、もともと唐船貿易に従事していた中国商人などの子孫が多くを占めていたもので中国語を学ぶ必要はなかった²が、阿蘭陀通詞の場合は、日本人がオランダ語を習得して通訳をつとめた。また通詞は、言語の専門家としてオランダ語以外の外国語を習得するよう幕府から命じられることもあった為、「外国語習得」が訓練の大きな割合を占めていたのであろう。さらにいえば、これは憶測に過ぎないが、長崎通詞の研究者は自身が通訳者ではない為、通訳といえば外国語の習得、という点だけに着目し、通訳技術の習得について関心を抱かなかった可能性もある。当時の資料を丹念にあたれば、長崎通詞の訓練法、上級に昇格する際の判定基準などに関する資料が見つかるかもしれない。

いずれにせよ、阿蘭陀通詞はオランダ語の専門家として蘭学の発展に寄与し、幕末には英語を学び、英学の基礎を築くなど、言語を通して日本の近代化に多大な貢献をしているのは確かである。

同時通訳の草創期

第二次大戦後になると、同時通訳訓練についての解説書が次々に刊行されるようになる。戦後外交を担った同時通訳のパイオニアは、自らを「たたきあげの大工」(國弘正雄のことば)³と称した通り、正規の訓練も受けないまま試行錯誤で同時通訳技術を獲得した。

1951年にサンフランシスコ講和条約が締結され、敗戦国日本が独立国家として国際社会に復帰してから10年後、1961年には福井治弘・浅野輔『英語通訳の実際—初歩から同時通訳まで—』(研究社)が刊行された。福井治弘・浅野輔の二人は、小松達也と同様、原水爆禁止世界大会で同時通訳の学生ボランティアをしている。原水爆禁止世界大会は1955年に第1回が広島で開催されて以来、世界各国から代表を招いて毎年開催され、第2回の長崎大会からは同時通訳方式が採用された。通訳は、初期の頃は東京外国語大学の学生(小松達也⁴など)が中心だったらしいが、やがて上智大学⁵や日本女子大学⁶なども参加した。訓練もなく、「どう訳してもいいから、原水爆反対ということだけは間違えるな」とだけ言われ、あとは見よう見まねで通訳をした。その実地体験から、通訳の何たるかを学んだ福

² 平塚ゆかり (2013)『よくわかる翻訳通訳学』(鳥飼玖美子編著、ミネルヴァ書房)を参照。大通事林道榮の父も、中国福建省から1623年、日本の大村に渡来している。

³ 鳥飼玖美子 (2007)『通訳者と戦後日米外交』(みすず書房)。

⁴ 小松達也は、その後、日本生産性本部派遣の米国視察団同行通訳者として米国国務省言語課勤務。帰国後、サイマル・インターナショナル設立(1965年)に関わる。

⁵ 鳥飼玖美子は大学1年次に参加。その翌年、国際会議運営会社ISSで半年間の同時通訳訓練を受けた後、2年次の後半に会議通訳の仕事始めた。

⁶ 佐野壬知子も半年間の同時通訳訓練をISSで受けた後、会議通訳者となり、ISSインスティテュート東京校通訳者養成コースの講師を長く務めた。

井治弘・浅野輔の両氏は、通訳の実際についての入門書を書こうと考えたのであろう。

1964年には、東京外国語大学を卒業し会議通訳をしていた金山宣夫が『英語通訳ハンドブック：会議通訳の常識』（原書房）を刊行。1969年には國弘正雄、西山千、金山宣夫による『通訳：英会話から同時通訳まで』（日本放送協会）が出版された。金山による「まえがき」を読むと「人間はついに月に立ちました」という文章から始まっている。月着陸の衛星中継は1969年7月20日（日本時間では21日）であり、同書の初版出版は1969年11月25日である。アポロ中継での同時通訳を経て執筆したというよりは、その前から準備されていたことが窺われるような充実した内容である。230頁に及ぶ入門書は、通訳を「コミュニケーション活動」の一環としてとらえ、全体を「理論」「練習」「実際」の3部に分けて構成している。さらには、通訳には「超学問分野的アプローチ」が必要だという考えのもと、同時通訳者であり文化人類学を専門とする國弘正雄、電気工学専門の西山千、国際コミュニケーション、国際経営が専門の金山宣夫が分担して執筆したとの説明がある。すぐれて現代的な問題意識で、フォノシートが付いていることだけが時代を思わせるくらいである。

第1部「理論」編は、「コミュニケーションの原理」の解説から始まっているが、「導管モデル」に依拠しており、コンテキストについての言及はない。ただし、通訳に「解釈」が必須であるという説明は加えている。理論編では通訳者の質の問題、通訳の方法論まで網羅している。第2部「練習」では、訓練についての考えから逐次通訳、同時通訳と具体例を豊富に入れ、ノートテイキングの実例を入れながら丁寧に指南している。第3部「実務」では、通訳規範に相当する事項も入れ、通訳倫理についても詳細に説明している。「通訳は黒子⁷（原文ママ）のように」（p. 171）では、エルベールの『通訳ハンドブック』が引用されている。興味深いのは、「通訳者はタレントか」（pp. 176-177）という項目で、アポロ11号宇宙中継以来、「通訳者がテレビにさかんに登場してくるようになって、マスコミ媒体に対処する術を身につけなければならなくなった」と問題提起しているのが時代性を映している。

1974年初版の『通訳教本 英語通訳への道』（日本通訳協会編、大修館）になると、巻末資料に「通訳関係図書」として、上記のような「概説書」が日本語で6点、英語で Herbert (1952) など4点が挙げられている。関連分野参考図書として、各種の英語学習書に加え、Nida and Taber (1969)⁸の日本版が紹介されている（E.A. ナイダ・C.R. テイバー・N.S. ブラノン著、沢登春仁・升川潔共訳『翻訳—理論と実際』研究社）。

1960年代後半から70年代にかけては、同時通訳訓練が民間の国際会議運営会社によって小規模に実施されていたが、出版された入門書を使うことはなかった。通訳訓練生が参考にするか、または通訳に関心のある個人が読んでいたに過ぎない。

大学において通訳訓練を実施することは、国際基督教大学（ICU）を例外として一般的なことはなかった。ICUでは、コミュニケーション論が専門の齊藤美津子が通訳講座を

⁷ 本来は歌舞伎用語の「黒衣（くろご）」。

⁸ Nida, E. A. & Taber, C. R. (1969). *The theory and practice of translation*. Leiden: E.J.Brill. 日本語版にはブラノンが参加し、日本の読者にとって分かりやすいよう日本語での用例を加えている。

担当し、1964年には「同時通訳の課題—オリンピック国際会議の経験から」が読売新聞に掲載され（11月7日）、1969年には「同時通訳」が『言語教育と関連諸科学』（言語教育叢書第1期5巻、文化評論出版）に掲載されている。サイマルを設立した同時通訳パイオニアの村松増美は「適性が90%、残りが勉強と運」⁹という考えであったが、齊藤美津子は「適切な訓練を受ければ誰でも同時通訳者になれる」と主張し続けた。その齊藤がICUで行なった基礎訓練は、「リピーティング（repeating）」と当時は呼ばれていた「シャドーイング（shadowing）」が中心であった。

日本生産性本部のアメリカ視察団に同行した通訳者の1期生であった村松増美の記憶では、選考の場でいきなりアイゼンハワー米大統領の演説を同時通訳させられ、十分な訓練がなくても現場に出られる人材を選んだようである。村松より少し後に渡米した小松達也によれば、国務省での訓練は「リプロダクション」（reproduction：英語で聞いたパッセージを、メモを取らずに聞き、直後に同じ語彙、表現を用いて再現すること）ばかりであったという¹⁰。

アメリカ国務省で、國弘正雄など2期生の同時通訳訓練に関わった青山清爾は、自身は通訳者ではなかったが、1966年にISSに招聘され同時通訳訓練を担当した。ISSは、1965年に国際会議運営会社として創立され、翌年には同時通訳者養成を無料で行なった。志願者数は不明であるが、選抜試験が実施され、半年間の短期集中訓練を経て選ばれた数名が、秋には国際会議に送り出された。

選抜試験には、「リプロダクション」が使われた。国務省でよくやっていたからかもしれないが、聞いて理解する力（listening comprehension）、それを記憶（retention）し、異言語で発信（production）するに十分な語彙、文法、語法、発音など総合的な英語力を測ろうという意味もあったと思われる。

週3回夜間の訓練では、最初の1時間はLL教室で「リピーティング（シャドーイング）」、次の1時間は政治・経済・国際関係などについて青山が講義し、それを訓練生に逐次通訳させては「そんな通訳をしたら国際問題になりますな」などと厳しく批評するというものであった。通訳者は言語を知っているだけでは駄目で、国際情勢に関する幅広い知識が不可欠だというのが持論であり、知識がない為に誤訳をしたり、訳出につまったりすると、「そんなことも知らないで同時通訳者になろうというのですか」と叱責した。通訳者は「通訳は分析的であれ（Be analytical.）」が口癖であった。

筆者が個人的に注意されたのは、高校生留学でアメリカに1年間滞在して身につけた英語であった。「そんなアメリカの高校生みたいな喋り方は国際会議で通用しませんよ。会議通訳者たるもの、もっと sophisticated な英語を使わなければ。それに国際会議に出席するのはアメリカ人だけではないのだから、アメリカ英語丸出しではなく、もっと neutral な英語にしろ」と叱られても、どうしたら良いかまでは教えてくれない。仕方なく、会議出席者の英語、先輩同時通訳者の使う英語などに注意を払い、「アメリカの高校生みたいな

⁹ 前掲書。

¹⁰ 前掲書。

英語」を矯正した。これは、指導者からのフィードバックと周囲から学ぶ社会化（socialization）が一体となり、「会議通訳者が使用すべき言語の質」についての規範が形成されたといえようか。

今、振り返ると、青山自身が、国務省の通訳官と接しているうちに通訳規範を内在化し、それを訓練生に伝授したように思われる。半年間の訓練で13名ほどの訓練生の半数以上は脱落し、残った数名が秋、完成したばかりの京都国際会議場で開催された青年会議所世界大会で同時通訳デビューを果たした。

大学英語教育への応用

高等教育という場に通訳訓練はなじまない、というのが従来の日本の大学の空気であったように思われる。文学の翻訳ならともかく、「通訳なんてものは、専門学校で訓練すべきこと」という主張をもつ大学教員が多かったが、その状況が変化したのには大学を取り巻く社会環境の激変がある。第一に、進学率の急増による大学の大衆化により、大学はもはや象牙の塔ではなくなり、社会のニーズに応える必要が出てきた¹¹。第二に、大学数の増加による学生確保の競争激化により、各大学は受験生が魅力だと感じるような教育内容を工夫するようになった。

さらに1987年臨時教育審議会答申で、英語教育の改革が強く要請されたことがある。答申を受け1989年に告示された新しい学習指導要領では、英語教育の目的が「コミュニケーション」にあることが明記され、中等教育のみならず高等教育現場でも「コミュニケーションに使える英語」が喫緊の課題となり、各大学がカリキュラム改革を迫られた。そのような流れの中で注目されたのが、アポロ計画や湾岸戦争などにおける衛星中継の放送通訳で広く認知されるようになっていた「同時通訳」である。

「コミュニケーションに使える英語」を実現する具体的かつ有効な指導方法として、1980～90年代から通訳訓練が各大学の英語カリキュラムに導入されるという状況が生まれ、通訳コース、通訳講座が全国の大学で開設されるに至った。それは、通訳者養成というよりは、学生の英語運用能力を高める為に通訳訓練を活用するということが目的であった。

通訳者出身の大学教員も徐々に増え、通訳訓練の英語教育への応用について研究論文を発表するようになった。通訳理論研究会を立ち上げ日本通訳学会初代会長となった近藤正臣、会議通訳者から異文化コミュニケーション研究者に転身した久米昭元、日本通訳学会第2代会長の鳥飼玖美子（在任中に、日本通訳翻訳学会に学会名称を変更）などが、異文化コミュニケーションとしての通訳、読解とサイトラ、コミュニカティブ・アプローチと通訳法など、さまざまな視点から通訳訓練の英語教育への応用を論じ¹²、2003年には、日本通訳学会の有志が、『はじめてのシャドーイング』¹³（学研）を出版した。

同時に、通訳者ではない大学教員がシャドーイングなどに関心を寄せるようにもなった。

¹¹ 大学設置基準の大綱化（1991年、大学審議会）により、教育課程の内容が各大学に委ねられると、この傾向は一層強まった。

¹² 詳細は、西村友美の担当章を参照。

¹³ 鳥飼玖美子（監修）、玉井健・染谷泰正・田中深雪・鶴田知佳子・西村友美（著）。

たとえば、早くも **1988 年**には、第二言語習得や言語学習の情意的側面を研究する**八島智子**¹⁴が、「通訳訓練の英語教育への応用 **I shadowing**」を『英学』(Vol.21 平安女学院短期大学)に発表し、**2004 年**には心理言語学を専門とする**門田修平**¹⁵が、英語教育学が専門の**玉井健**¹⁶と共著で『決定版 英語シャドーイング』(コスモピア)を出版している。

英語教育および英語音声学が専門の**田邊祐司**¹⁷は **1994 年**、「日英通訳訓練法と英語コミュニケーション (原文ママ) 能力との接点」(『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 23)を発表。「通訳法の中にも、一般的な外国語教育の様々な段階に応用できるものがある」と、代表的な基礎通訳法として以下の 12 を紹介している。

- | | | |
|----------------------|--------------------------------|---------------------|
| 1) Quick Response | 2) Shadowing | 3) Active Listening |
| 4) Retention | 5) Note-taking | 6) Slash Reading |
| 7) Sight Translation | 8) Logical Analysis | 9) Paraphrasing |
| 10) Summarization | 11) Articulation Story Telling | |
| 12) Describing | | |

田邊は、「日英通訳法は大手の通訳者養成学校・機関などそれぞれ独自の長年の経験から蓄積されたノウハウがあり、その詳細な内容については受講者として多額の投資をし、学ぶ以外方法はなかったが、ここにいたって少しずつ公にされるようになってきた。この観点からの出版物も増え、学術的な観点から通訳技法を取り上げるものも現れるようになってきた」「各種の研究・講演会などでも通訳法が導入され、これを活用する講座も増加している。さらには大学で通訳講座を開講しているところも多くなっている (『通訳事典 93』)」ことも紹介している。その理由として田邊は、「異文化間の professional なコミュニケーションとしての通訳者がコミュニケーション能力という点において優れているのは、ある意味では当たり前のことで、その通訳者を育てる通訳法がコミュニケーション能力を向上させないはずはない」としている。

最近の動向

「通訳」とは会議通訳であり同時通訳であった時代が戦後の日本で長く続いたが、21 世紀に入りグローバル化が進展すると、各地で多言語状況が生起し、世界的な現象として「コミュニティ通訳」(community interpreting/ public service interpreting)の重要性が認識されるようになった。日本においても、多文化共生社会に移行するにつれ、日常的な医療、教育、司法、法廷などの場における対話通訳が大きな課題となってきた。

主として知的エリートが参加する国際会議における同時通訳と異なり、コミュニティ通訳の場合は、人権としての母語使用、言語的あるいは社会的弱者が権力と対峙するという

¹⁴ 現在、関西大学外国語学部教授。

¹⁵ 現在、関西学院大学大学院言語コミュニケーション研究科教授。

¹⁶ 現在、神戸市外国語大学国際関係科教授。

¹⁷ 現在、専修大学文学部教授。

力関係の差、文化やアイデンティティの問題などが複雑に錯綜した現場で、「今、ここ」での対話を通訳するという重い責務を担うことになり、通訳訓練の重要性ははかりしれない。しかし実際には、友人や家族、子どもなどの素人ボランティアが通訳をすることが多い。そのような劣悪な実態の改善、通訳訓練の機会を広く提供する方策、資格認定制度の確立など、課題が山積しているのが現状である。

第22期国語審議会答申（2000）¹⁸では、「言語の背景にある文化的・社会的事情を熟知した通訳者の存在が重要であること」が確認され、「通訳は、高い母語能力と外国語能力、言葉の文化的背景を含む幅広い教養など高度な能力を要する専門職である。我が国における通訳教育は、大学のほか、外国語学校、民間企業などで行なわれているが、今後は大学における学部・大学院の教育を充実し、国際化に対応する為の日本の人的資源として、高度に訓練された職業通訳者及び高い見識を有する通訳理論の研究者を養成することが望まれる」と提言されたが、それがどの程度まで達成されたかについては、評価が分かれるだろう。

最近では、技術革新により実務翻訳者養成に新たな要素を加える必要が出てきている¹⁹ように、通訳分野でも、文化的解説を加えることが容認されない法廷通訳と違い文化的仲介者としての役割を求められる医療通訳など、文化的要素の処理や通訳者の役割規範などが通訳の種類によって異なる場合があり、分野別の教育内容を整理する必要も出てきている。

このような状況をふまえると、大学の学部レベルで言語とコミュニケーション、基礎的な通訳技術を教育すると共に、大学院レベルで理論と実践をきちんと取り込んだ通訳者養成カリキュラムを提供することが強く求められる。東京外国語大学で実施されている、学部と大学院を連結させた5年一貫の通訳者養成コースなどは、一つの可能性であろう。

そのような教育環境が整ってくると、必要なのは教科書である。これまでも、通訳スキルに関する指導書は多く出版されているが、大学・大学院で使えるような、理論解説を含んだ網羅的な教科書は稀である。そのような問題意識から作られたのが、**鳥飼玖美子編著『よくわかる翻訳通訳学』（2013年秋刊行予定、ミネルヴァ書房）**である。学部レベルの授業でも使用できるよう、やさしく分かりやすく専門分野を解説する入門書シリーズに、初めて翻訳通訳学が加わったことになる。同時通訳萌芽期の訓練では、指導者から注意され先輩を真似して通訳を練習し、市販されている指南書は自宅に帰って適当に読むだけであったが、これは非効率的であり時間がかかる。教育を体系化しようとするなら、授業で使える教科書は必須である。教科書を用いた正規カリキュラムによる教育を通して、実践の基盤にある理論を学ぶことで、「なぜ自分はこう訳すのか」を説明できるようになり、そうやって初めて通訳は「専門職」として確立されるといえる。

＊

日本学術会議は2012年11月に公表した「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準言語・文学分野」において、通訳翻訳と大学教育の関連をこう論じている。

¹⁸ 詳細は、鳥飼玖美子（2001）「第22期国語審議会答申に見る通訳および通訳教育」『通訳研究』第1号、pp. 126-135。

¹⁹ 山田優（2013）『よくわかる翻訳通訳学』（鳥飼玖美子編著、ミネルヴァ書房）

大学外国語教育にとって通訳通訳を学ぶことには、根源的な意味がある。「訳す」という行為は、起点言語のテキストを理解し、解釈し、それを目標言語で表現することであり、すなわち言語間の異質性と格闘することにはかならない。つまり外国語教育において「訳す」という実践は、自らの言語と文化を省察しながら異なる文化を体験し複眼的思考を獲得することであり、世界の多様性を認識する手だてとなり得る。

したがって訳読も、外国語から日本語への機械的な逐語訳に終始することのないよう指導方法を工夫することで、異なる言語が内包する文化的特質や差異への気づきを学生に与える点で有用でもあれば、必要でもある。また、日本語から外国語への訳出の訓練は、発信型コミュニケーション能力を育成するにおいて重要な役割を果たす。

なお、ひとつの外国語に熟達したからといって通訳や翻訳ができるわけではなく、通訳通訳の理論に関する研究を含めた専門教育を大学院レベルでおこなうことが求められるが、通訳翻訳を可能にするための言語力の基盤は、学部での外国語教育で形成することを目指したい。(pp. 4-5)

この視点が広く日本の大学教育で受容され、大学・大学院における通訳翻訳教育が充実したものとなり、通訳翻訳学の知見を有する人材、専門職としての通訳者翻訳者への道を進む人材が多く輩出されることを願うものである。

鳥飼玖美子による文献

(ii) 通訳理論研究の視点

監訳、ポエヒハッカー, F. 著 (2008) 『通訳学入門』 みすず書房

原著 (Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London & New York: Routledge.)

編著 (2013) 『よくわかる通訳通訳学』 ミネルヴァ書房 ⇒ 下記(ii) 通訳理論研究の視点も参照。

(a) 英語 (外国語) 教育への応用

単著 (1990) *Applying Interpreters' Skills in Language Classrooms: Guessing Words from Context*. 東洋英和女学院大学『人文・社会科学論集』 第 2 号, pp. 69-83.

単著 (1992) 「大学英語教育における会議通訳法の応用」『英語音声学と英語教育—島岡丘教授還暦記念論文集』 開隆堂出版, pp. 312-17.

単著 (1993) 「同時通訳方式による英文講読—Sight Translation」『実用英語の世界—篠田義明教授還暦記念論文集』 南雲堂, pp. 47-52.

単著 (1993) 「時事英語教育の一環としての会議通訳訓練」日本時事英語学会『時事英語学研究』 第 32 号, pp. 191-195. ⇒ 下記(a) 英語 (外国語) 教育への応用も参照。

単著 (1994) 「通訳訓練法を英語教育に生かす—その実践と考察」国際コミュニケーション

ン英語研究所『IRICE PLAZA』第4号

単著 (1997) 「英語教育の一環としての通訳訓練」大修館『言語』第26巻 第9号, 平成9年8月号特集「通訳の科学: 同時通訳メカニズムの理論と応用」 pp. 60-66.

単著 (1997) 日本における通訳教育の可能性—英語教育の動向をふまえて『通訳理論研究』第13号, pp. 39-52.

単著 (1999) Interpreter Training and Foreign Language Teaching in Japan. 通訳理論研究会「通訳理論研究」18号, AILA Tokyo Special Issue. (1999.11.1) pp. 118-24.

単著 (2001) 「現代における通訳の意味と通訳教育の重要性」勉誠出版『SCIENCE of HUMANITY』第33号, 特集「国際社会に対応する日本語の在り方」 pp. 20-26.

単著 (2001) 「第22期国語審議会答申に見る通訳および通訳教育」日本通訳学会『通訳研究』第1号, pp. 126-35.

単著 (2001) 「通訳と通訳訓練」イカロス出版『通訳者・翻訳者になる本2002』 pp. 67-70.

(c) 通訳者の養成

単著 (1998) 『ことばが招く国際摩擦』ジャパンタイムズ

単著 (2001) 『歴史をかえた誤訳』新潮文庫

単著 (2007) 『通訳者と戦後日米外交』みすず書房

単著 (2013) 『戦後史の中の英語と私』みすず書房

(d) 異文化コミュニケーション論の視点

単著 (1994) 「通訳と翻訳—異文化の橋渡し」『異文化理解とコミュニケーション I ことばと文化』三修社, pp. 155-75.

単著 (2005) 「通訳における異文化コミュニケーション学」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語科学1 異文化とコミュニケーション』ひつじ書房, pp. 24-39.

単著 (2011). Conference Interpreters and Their Perception of Culture: From the Narratives of Japanese Pioneers. In R. Sela-Sheffy & M. Shlesinger (Eds.), *Identity and Status in the Translation Professions*. (pp.189-207). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

(i) 通訳基礎トレーニング

単著 (2001) 『プロ英語入門』講談社インターナショナル

監修 (2003) 『はじめてのシャドーイング』学研

鳥飼玖美子編著 (2013) 『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房

通訳学を概観した単行本は本邦では西洋の文献の翻訳しかなかったが、通訳学・翻訳学を併せて初学者である大学の学部生を対象にしたものが初めて出版された。「第一部: 異文化コミュニケーションとしての通訳と翻訳」「第二部: 翻訳と通訳の歴史」「第三部: 社会における翻訳と通訳」「第四部: 翻訳通訳研究へのアプローチ」という構成で、通訳・翻訳に関する多様なテーマを包括的に扱っている。(河原)

【特別寄稿】

(i) 通訳教育全般、古い文献（水野的）

【概観】先駆け期の文献は極めて少ない。戦前、といっても明治 38 年に、馬紹蘭・足立忠八郎『北京官話：通訳必携』（金刺芳流堂）のような本が出版されてはいるが、その内実は対訳会話書にすぎない。また日本統治下の台湾での内地人下級官僚の通訳養成を目指した雑誌『語苑』（台湾語通信研究会発行）の存在も知られているが、やはり様々な実務分野の用語集の趣が強い。通訳の教育や訓練、あるいは通訳全般についての記述や公刊された書籍は第二次世界大戦後まで待たなければならない。（江戸時代については、大西比佐代（2007）「江戸時代の通訳者教育論—雨森芳洲の業績を中心に—」『神戸女学院大学論集』54/1 がある。）（水野）

外務省終戦連絡中央事務局監修・外務省通訳養成所編纂（1946-1949）『日米會話講座』日米會話講座刊行会

この講座は全 6 巻（12 冊）刊行の予定だったようだが第 5 巻第 2 輯まで（10 冊）しか確認できていない。（第 6 巻は刊行された形跡がない。）担当講師として熊谷政喜（代々木八幡ペテル教会牧師）、アイナ・メイ・クマガイ（その夫人）の名がある。（講師は他にも何人かいた。）外務省通訳養成所（Interpreter Training School）は昭和 21 年 8 月に設立され、試験に合格した一般人のクラスと警察から委託を受けた警察官クラスがあった。会議通訳者ではなく、進駐軍関連業務に携わる通訳者の養成を目的にしていた。『日米會話講座』はそのための教科書ではなく、市販された書籍である。主な内容はテーマ別・場面別の日英対訳会話集であるが、日米慣習の違いについての講義などもある。通訳については、第 2 巻第 1 輯の冒頭に「通訳の心得」という項目があり、「進駐軍の命ずることを充分に行う」、「（日本人）労務者への臨み方には、敗れた国日本の悲しみを共に担っている者としての愛情がなければならない」、「自己を通訳の過程にはさまない」、「国と国の親善の媒介とはならぬ、いわゆる闇の媒介等は決してしない」、「派遣された職場に対して、誠実と忍耐とを持つ」といった内容が書かれているだけである。通訳の技術に関する記述はない。（水野）

岡崎熊雄（1947）『通訳概論（通訳者の必携）』ライトハウス出版部

著者は当時大阪にあった通訳養成所（Osaka Interpreters' Training Institute）の講師となっているが、のちに泰日協会学校（バンコク日本人学校）の校長を務めた岡崎熊雄氏と同一人物と思われる。通訳養成所の詳細は不詳。260 ページあるが、後半は英語であり、実質 130 ページである。（「本書は The Principle of Interpretership の邦訳である」とあるから、英語の方がオリジナルらしい。）

目次は、「緒論」「第 1 章 通訳と翻訳の意義」「第 2 章 通訳の歴史」「第 3 章 英語の日本への紹介」「第 4 章 通訳行為の性質」「第 5 章 言語の本質」「第 6 章 通訳行為の目的」「第 7 章 通訳の技巧」「第 8 章 通訳者の役割」「第 9 章 通訳者側の準備」「第 10 章 通

訳者の使ひ方」「結語」。

これだけを見れば「通訳概論」としては申し分のない内容に思えるかもしれないが、実際は違う。たとえば最も長い「第7章 通訳の技巧」を見ると、まず「相手の心を掴む方法」を長々と論じた後、「通訳技術の非常に実際的な部面」について述べるが、「通訳者が通訳を行ふ場合には、通訳者は談話の要点をかい掴んで、之を相手方が判る程度の言葉に翻訳しなければならぬ」という一節からもわかるように、著者が考えている通訳とは逐次通訳以前のアドホックな通訳のようである。この時期、東京裁判は進行中であつたが、著者は通訳の詳細を知るまでには至っていなかったのだろう。時代的な制約は覆い難い。(水野)

福井治弘・浅野輔（1961）『英語通訳の実際—初歩から同時通訳まで—』研究社

福井は1935年生れ、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校名誉教授、筑波大学教授、南山大学教授を歴任し、のち広島市平和研究所所長。浅野は1936年生れ、TBSのJNN『ニュースコープ』のキャスター、ニューズウィーク日本版編集長、東京国際大学教授を務めた。

本書は前2著とは異なり、英日通訳の概要と技術を堅実にまとめた成書である。逐次通訳と同時通訳について詳細に解説しており、基本的なところでは現在市販されている通訳訓練書の記述とさほど変わりはない。逐次通訳ではノートテイキングについて日英、英日にわたって詳細に解説があり、同時通訳でも「順送りの訳」という言葉こそ使っていないが、「構文上の手術」として「原文全体の構成に思い切った裁断を加えて、文頭からの翻訳が可能になるよう」な手法を説明している。

この本の意義は世界的な文脈の中に置いてみるとはっきりする。HerbertのManuel de l'interprèteが1952年、RozanのNote-taking in Consecutive Interpretingが1956年、SeleskovitchのL'interprète dans les conférences internationalesは1968年の刊行なのである。記述の範囲はHerbertとRozanよりも広く、Seleskovitchには7年先んじている。当時20代前半の青年たち（というのは、浅野氏が実際は学生時代に書いたと言っていたからである）がなぜこの突然変異のような本を書くことができたのかはよくわからない。おそらく著者たちが原水爆禁止世界大会の事務局にコミットしていたことがひとつの要因かもしれない。(水野)

金山宣夫（1964）『英語通訳ハンドブック—日本でもっとも必要な技能』原書房

著者は1936年生れ、元東洋学園大学教授。「第1章 英語通訳における日本語」「第2章 思考と言語のあいだ」「第3章 ケーススタディ—観光通訳」「第4章 逐次通訳」「第5章 同時通訳」「第6章 通訳の位置」「第7章 ことばの有機的研究」「付録 演習」から構成されている。通訳ノートについては「原語でなく通訳される方の言語でメモをとること、発言を全部書き取ろうとしないこと」というぐらいで、具体的な説明はない。同時通訳については「あわびとり訳（十分待って訳す）よりもかたっぱしから訳（できるだけ即時的に訳す）」、「同時通訳用構文」という言葉で、訳出手法をごく簡単に説明しているに

すぎない。事例に即した説明はあるが、まだ理論的な説明はない。新しい点としては、「聞きながら訳すことができない」状態を脱するための練習方法としてシャドーイング（という言葉は使っていないが）と、単語の即訳が挙げられている。3年前に出ている福井・浅野の本への言及はない。（水野）

この後、國弘正雄・西山千・金山宣夫（1969）『通訳—英会話から同時通訳まで』日本放送出版協会、西山千（1970）『通訳術』実業の日本社、が出て、松本兼太郎・向鎌治郎・中沢弘雄、日本通訳協会（1976）『通訳教本 英語通訳への道』大修館書店、と続くが、いずれも有名で比較的簡単に入手できる本なので、贅言を要しないだろう。（水野）

(ii) 通訳理論研究の視点（南津佳広）

【概観】本節では、通訳学の基礎研究、つまり、通訳教育をはじめとする応用研究を除いた通訳の理論的研究に焦点を当てる。そのため、手話通訳の研究に関しても本節では触れないことを容赦されたい。通訳学の基礎研究を年代別に概観してみると、学術的に大きく4つの波があることがわかる。

- ①通訳者による経験の体系化
- ②心理学者・言語学者による同時通訳の同時性の研究
- ③通訳者による科学的研究への挑戦
- ④他分野を参照した通訳者による実証的研究

まず①から見てみよう。1950年代から60年代にかけて行われている。ここで代表的なほぼものを2つあげる。Rozan と Paneth である。Rozan は逐次通訳のノート・テーキングに関する基本テクニックなどを述べているが、学術的な裏付けは弱い。だが、この後に執筆される逐次通訳におけるノート・テーキングに関する研究は、英語のみならず、ドイツ語、ロシア語、中国語の逐次通訳におけるノート・テーキングに関する研究を読む限り、ほぼ Rozan を踏襲するほど影響を与えていた。また、Paneth は会議通訳全般に関して述べられた初めての学術論文と位置づけられている。逐次通訳と同時通訳の双方を体系的にまとめているが、Rozan 同様学術的な裏付けが弱い。とはいえ、Paneth が論文の中で提示した問題を、その後の研究者たちが取り上げていることを考えるなら、通訳学の方向性を位置づけたものとみなせる。

- Rozan, J-F. (1956). *La Prise de Notes en Interpretation Consecutive*. Geneve: Georg.
- Paneth, E. (1957). *An Investigation into Conference Interpreting*. Master Theses, University of London. (unpublished).

次に、②の心理学者・言語学者による同時通訳の同時性の研究を概観しよう。代表は、Barik, Goldman-Eisler と Gerver であろう。Goldman-Eisler は同時通訳におけるポーズが貴重な認知資源となることに関心を示し、起点言語と訳出言語の構文の変化の関連性について触れ、同時通訳者は注意を焦点化していることを述べた。また、Gerver の博士論文では、上述した Paneth が示した同時通訳のプロセスの概略に対して、Gerver は人間の発話処理の

プロセスをモジュール化した各処理機構によって行われるものとして、同時通訳者による発話処理の同時性に着目して研究を行った。input buffer/output buffer を通訳プロセスモデルに組み込み、同時通訳における注意の分散を示唆した。両者の研究成果は、実務通訳者による研究から出てこないものであり、通訳研究の裾野を広げたといえる。

- **Goldman-Eisler, F. (1968). *Psycholinguistics: Experiments in Spontaneous Speech*. London: Academic Press.**
- **Gerver, D. (1971). *Simultaneous Interpretation and Human Information Processing*. Ph.D. thesis, University of Oxford. (unpublished).**

1970年代後半に入ると、心理学者・言語学者による通訳研究と通訳者による研究が入り交じり始める。下記の2つの著作はその典型であろう。まだこの段階では、通訳者による研究は、経験を体系化し、その成果を通訳者養成へいかに還元するかを目的とする傾向にあるが、通訳者による実証研究の契機を提供した貴重な論文集である。

- **Brislin, W. R. (Ed.). (1976). *Translation: Application and Research*. New York: Gardner Press Inc.**
- **Gerver, D. and Sinaiko, H. W. (1978). *Language, Interpretation and Communication*. New York: Plenum Press.**

時は少し遡るが、1960年代後半から、他分野の研究者による通訳研究に対抗するかのようになり、通訳者による通訳の科学研究への挑戦が盛り上がり始める。③の代表作としては、Seleskovitch と Chernov の研究である。Seleskovitch の「意味の理論」に関する研究はその後大いに通訳研究にさまざまな影響を及ぼしている。「意味の理論」に関する論争はあまりに有名なもので、ここでは省略する。また、旧ソ連では独自の通訳研究が発展していたが、その代表として Chernov の心理学をもとにした予測モデルがあげられよう。Chernov の研究は、近年英訳されたので、入手可能となった。

- **Chernov, G. V. (2004). *Inference and Anticipation in Simultaneous Interpreting: A Probability-Prediction Model*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. (edited with a critical foreword by R. Setton and A. Hild.)**

また、ドイツでもスコpos（目的）理論を基にした通訳研究が発展しているが、その先駆けとも言える論文が昨年英訳されたので、入手可能となっている。

- **Reiß, K. & Vermeer, J. H. (Eds.). (2012). *Towards a General Theory of Translational Action: Skopos Theory Explained*. (translated by C. Nord) Manchester: St Jerome.**

その後、あらわれ始めたのが、④の通訳者が他分野を参照にして行った、通訳の実証研究である。代表的な文献として下記の3つがあげられる。このあたりから、認知心理学・言語学（特に認知語用論）を参照した実証研究が、一定の成果を結び始める。それらをまとめた論文集で優れた論文を集めているのが下記の3点である。

- **Taylor, C. & Gran, L. (Eds.). (1990). *Aspects of Applied and Experimental Research on Conference Interpretation*. Udine: Campanotto Editore.**
- **Lambert, S. & Moser-Mercer, B. (1994). *Bridging the Gap: Empirical Research in Simultaneous Interpretation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**

- **Gambier, Y., Gile, D., & Taylor, C. (1997). *Conference Interpreting: Current Trends in Research*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**

また、90年代後半になると、同時通訳を対象にした博士論文が数多く出されるようになる。同時に、通訳研究の方法論も論じ始められるようになった。代表的な博士論文としては、Settonや Shlesinger、そしてLiuがあげられる。Settonは認知語用論をもとに、語用論モジュールを想定した同時通訳のプロセスモデルを構築し、Shlesingerはworking memoryの理論を援用し、同時通訳者が語の長さや話すスピードにどう対処しているのか実証研究を行った。さらに、Liuは同時通訳者の working memoryがどの程度までより大きな貯蔵能力、より効率的な情報処理を反映するのかと、同時通訳者の情報処理がdomain specificであるのかについて研究を行った。

- **Setton, R. (1999). *Simultaneous Interpretation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**
- **Shlesinger, M. (2000). *Strategic Allocation of Working Memory and Other Attentional Resources in Simultaneous Interpreting*. Ph.D. thesis, Bar Ilan University. (unpublished).**
- **Liu, M. (2001). *Expertise in Simultaneous Interpreting: A Working Memory Analysis*. Ph.D. thesis, The University of Texas. (unpublished).**

2000年以降、通訳学の方法論が提示されるようになった。代表的な論文集として、以下の4つをあげる。方法論が体系化されはじめたことは、通訳学が学術研究のひとつとしての基盤を築いた証でもある。

- **Gile, D., Dam, V. H., Martinsen, B., & Schjodager, A. (Eds.). (2001). *Getting Started in Interpreting Research*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**
- **Garzone, G. & Maurizo, V. (Eds.). (2002). *Interpreting in the 21st Century*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**
- **Angelelli, V. C. & Jacobson, E. H. (Eds.). (2009). *Testing and Assessment in Translation and Interpreting Studies*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**
- **Nicodemous, B. & Laurie, S. (2011). *Advances in Interpreting Research*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.**

最後に、通訳学が科学的な学問領域を形成するのに50年近くかかっていることに着目したい。通訳という行為は、人間の日常的な営みの上に、通訳固有の *expertness* があって成り立つ行為である。通訳学の発展を時系列で概観すると、この通訳固有の *expertness* への固執が通訳学を科学的な学問領域として確立するネックになったと言えるのではないか。その証左のひとつとして、通訳固有の *expertness* が特に求められるとみなされがちな、同時通訳を対象にした研究を非実務通訳者の他分野の研究者と実務通訳者でもある通訳研究者との間で長年繰り広げられてきたことがあげられる。

実務通訳者でもある通訳固有の *expertness* を持たない人が通訳を対象に研究することに対して、一種の拒絶反応を示し、異分野間での研究の交流が進まなかったことが裏付けられる。そのため、実務通訳者でない他分野の研究者にとっては関心を持たれづらいものになったのではないかとはいえない。いまでも、その傾向が多かれ少なかれ残っていることは否めない。

なぜなら、他分野の研究者が通訳を対象にした研究の数が年々減っているからである。

でも、考えてみてほしい。通訳という行為は、発話理解と産出という人間の日常的な営みが根底となっている。通訳者による通訳固有の *expertness* に着目した研究とその応用だけではなく、通訳という行為を可能にさせる根底的な営みに焦点を当てた基礎研究なしには、通訳研究の裾野は今後ますます狭くなるばかりである。

同時通訳に限らず、逐次通訳にもまだまだ研究開拓の余地はある。逐次通訳に関しては、上述した Rozan の他、1960 年代の Mignard-beloroutchev や 1980 年代の Matyssek や Seleskovitch など、研究の数は少なかったが、近年ノート・テーキングを巡って研究が増えつつある。ノート・テーキングのテクニックだけではなく、認知語用論を援用した実証研究も行われている。

➤ Albl-Mikasa, M. (2010). *Notationssprache und Notizentext*. Narr Dr. Gunter.

通訳研究の裾野を広げ、科学的な学術領域の基盤をさらに強めるためにも、他分野の研究成果を援用した基礎的研究は必要不可欠であろう。そのためにも、他分野の学会にて積極的に研究成果を発表し、他分野との研究の交流が求められるのではないだろうか。(南津)

(iii) 翻訳教育の視点 (長沼美香子)

【概観】通訳も翻訳も異文化コミュニケーションに深くかかわることは、その実践者たちの実感のみならず、トランスレーション・スタディーズの研究者らに広く共有されている。しかしながら、昨今のコミュニケーション重視の英語教育では「訳す」ことは、得てして悪者扱いだ。通訳教育と翻訳教育のどちらにも共通するのは、「訳」をめぐる問題系であろう。これは、日本に固有の現象ではない。「19 世紀末以来、訳は言語教育の厄介者」という点に国際的な応用言語学者がメスを入れたのが、Cook, G. (2010). *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment*. Oxford: Oxford University Press. [邦訳は、ガイ・クック著、齋藤兆史・北和丈訳 (2012)『英語教育と「訳」の効用』研究社] である。もっとも、英語学習における翻訳は、わが国では古くて新しい問題でもある。先駆的な文献として、高橋五郎 (1908)『英文訳解法』同文館、澤村寅次郎 (1935)『訳読と翻訳』研究社などもあるし、月刊誌『英語世界』第 3 巻第 5 号 (博文館, 1909) は「解釈と翻訳」という特集号となっている。英語教育の現場では旧弊とされる「訳読」を、通訳や翻訳という観点から今一度改めて見直す現代的意義は大きいだろう。

さて、旧翻訳研究分科会が実施した調査の結果は、ゼロ年代以降の比較的新しい大学教育における翻訳教育の実態把握に有用である。翻訳教育調査プロジェクト・チーム (2008)「わが国の大学・大学院における翻訳教育の実態調査概要」、長沼美香子 (2008)「アンケートにみる日本の大学翻訳教育の現状」(どちらも『通訳研究』第 8 号) と合わせて、「集計結果の生データ」も次の URL で参照されたい。

http://jaits.jp.org/home/Kaishi_Archive/Jaits8-on-index.html

この調査からは、大学における翻訳教育の多様なニーズも明らかになった。翻訳研究育成

プロジェクト有志編 (2012) 「特別企画：翻訳教育〈私の推薦図書〉」『翻訳研究への招待』第7号 (http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol7/No.7-00-suisen_tosho.pdf) は、狭義の翻訳研究にとらわれないユニークな文献案内となっている。

以上ここでは翻訳という視点から、通訳教育にも関連すると思われる文献の一部を限定的に紹介した。翻訳教育においても包括的な文献集成が待望される。(長沼)

【プロジェクトメンバーによる寄稿】

(a) 英語(外国語)教育への応用 (西村友美・友野百枝・宮元友之)

【概観】通訳の英語(外国語)教育への応用について論じた論考は海外ではほとんどないに等しい。一方、国内では1980年代後半から通訳の各種訓練法を一般の英語教育に応用する事例が報告され始めた。その多くが通訳訓練法(とくにいくつかの個別技能訓練)の有効性を主張するものだったが、2000年前後よりとりわけシャドーイングが注目され、英語教育現場で一種のシャドーイング・ブームを生み出した。しかし、なぜこれら通訳訓練法が効果的なのかについてはいまだ明らかでない部分が多い。玉井(2002, 2005など)は理論的にシャドーイングを考察した研究としてブームに一石を投じたと言える。近年では、個々の訓練法ではなく、総合的な通訳訓練が学習者のコミュニケーション能力や問題解決力の養成に寄与できる側面に光を当てた研究が台頭してきている。(西村)

久米昭元(1985)「逐次通訳へのアプローチ—日本語訳出における比較研究—」『時事英語学研究会誌』24号, pp. 23-34.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/1985/24/1985_23/_pdf

逐次通訳の演習を受講する被験者の、ノートテイキングに基づく英語から日本語への訳出と原稿に基づく訳出を比較した研究。また通訳の演習は、①英語の聴取力、②母国語の表現力、③パブリックスピーキング能力、の向上に大いに役立つと結論づけている。(友野)

久米昭元(1988)「同時通訳法による英作文演習の試み」『時事英語学研究会誌』27号.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/1988/27/1988_93/_article/-char/ja/

英作文の演習クラスで、LLから流れる日本語を同時に口頭で英語に訳す方法を試みたケース・スタディである。この方法が一定の条件の下では英語表現力の向上に有効であることが明らかになった。(友野)

八島智子(1988)「通訳訓練の英語教育への応用 I — shadowing —」平安女学院短期大学紀要『英学』第21号, pp. 29-37.

シャドーイング能力と他の聴解テストとの相関を調べる実験を行った。被験者は少なかったが、高い相関が観察されたという。応用の際注意すべき点にも触れつつ、シャドー

イングの一般のリスニング訓練への応用可能性を論じている。(西村)

八島智子(1992)「通訳訓練の英語教育への応用 II—コミュニケーション教育としての<日-英>通訳練習の意義—」平安女学院短期大学『英学』第25号, pp. 21-30.

コミュニケーション重視の英語教育にあつては、Cummins (1980) の言語能力理論 (CALP/BICS) に基づき、BICS を強化する教育環境を整備する必要があるという。そのうえで、日英通訳演習は BICS から CALP への橋渡しの役割を果たせるとする。最後に実践経験から、日英通訳練習を応用した3つの指導法を紹介している。(西村)

児島晃(1993)「時事英語教育での FIFO 方式の活用」『時事英語学研究会誌』32号, pp. 101-110.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/1993/32/1993_101/_article/-char/ja/

FIFO (First in first out) 方式は後戻りしないで先に入ってくる情報からどんどん理解していくやりかたで、通訳訓練におけるサイトラの基本的な読み方として知られている。時事英語の教育でも非常に効果的であるとする実践報告。FIFO を用いたニュースの読み方、理解方法の実例を挙げている。(友野)

鳥飼玖美子(1993)「時事英語教育の一環としての会議通訳訓練」『時事英語学研究会誌』32号, pp. 191-195.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/1993/32/1993_191/_pdf

背景知識の習得、知らない語句への対処、論理的分析、大意把握などの面で通訳訓練の手法は時事英語教育に有効であるという考えのもとに、学部生に実践した記録である。学生の反応も良かった。このアプローチはさらに発展できる可能性があることを示唆している。(友野)

田邊祐司(1994)「日英通訳訓練法と英語コミュニケーション能力との接点」『中国地区英語教育学会研究紀要』第23号, pp. 31-41.

基本的かつ代表的な通訳訓練法12種類を概観し、Canale (1983) の4つのコミュニケーション能力に心理的能力と異文化適応能力を加えた6つのコミュニケーション能力とこれら通訳法の関係をマトリクスに表した。ただし著者が断っているように、このマトリクスは著者の経験と主観にのみ基づいているものである。(西村)

染谷泰正(1996)「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用」『通訳理論研究』11第6巻2号

<http://www.someya-net.com/kamakuranet/47thTsuyakuKenkyuReport.html>

シャドーイング、リテンション、クイックリスポンス、パラフレージングは、通訳訓練の代表的手法と考えられているが通訳能力の向上に直接関係するものではない。英語力向上もあわせて行う日本の通訳訓練においてはその点の混同があると指摘。シャドーイ

ングに関してはプロソディー感覚の向上に役立つとしてその方法を詳しく述べている。
(友野)

玉井健 (1997) 「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」『時事英語学研究会誌』 36 号, pp. 105-16.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaces1962/1997/36/1997_105/_article/-char/ja/

シャドーイングは、通訳訓練に用いられる代表的な手法であるが、外国語教育において聴解力を伸ばす効果があることを実験から証明している。理論的にも作動記憶モデルと言語痕跡保持時間理論により支持されるものだとして、シャドーイング害悪説を否定している。(友野)

實吉典子・相京美樹子 (1999) 「英語教育における通訳訓練の応用」『清泉女子大学人文科学研究紀要』 第 20 号, pp. 1-26.

3 章構成の論考。まず高等学校学習指導要領に依拠し大学でも学生のコミュニケーション能力の育成を重要視すべきという。そのために通訳訓練が有効であるとし、実践例を紹介している。つぎに通訳の訳出方略を具体例で解説し、一般的な英語教育への応用を 4 技能別に論じ、最後に、英日通訳の場合の日本人通訳者は SL の意味把握を母語でおこなっているとし、英語学習のどの段階においても母語による翻訳や介入を排除する必要はないと主張している。(西村)

中原功一朗 (2001) 「通訳トレーニング技法とその評価：一般的な英語教育への転用にあたって」『自然人間社会』 Vol. 30, pp. 67-93.

様々な通訳トレーニング技法について説明し、それらを一般的な英語教育へ取り入れることの是非及び取り入れる際の留意点について論じた論文。通訳トレーニングの中には英語教育の指導で強調されるものとは相対立する手法が存在しているが、両者を相補的に利用し教育効果を高めることが重要と指摘している。(宮元)

角山照彦 (2002) 「通訳訓練法の一般の英語教育への応用について」『広島文教女子大学紀要』 第 37 号, pp. 11-20.

通訳訓練法の中のシャドーイング、サイト・トランスレーション、クイック・レスポンスの 3 技法について、先行研究に基づいて指導法や効果を概観している。また、著者はこれらをリスニングの授業に応用して受講者の肯定的な反応をアンケートで確認し、音声面を重視した演習技法の一つとして通訳技法を一般の英語教育に取り入れるメリットを論じている。(西村)

熊谷ユリヤ (2002) 「異文化間・異言語間コミュニケーションの視点から見た通訳教育の多面的効果」『Hokkaido JACET Journal』 Vol. 1, pp. 55-63.

異文化間コミュニケーション論、英語表現研究という既存の授業の枠内において通訳教

育を導入することにより、当該授業科目の理論講義、通訳の疑似体験、通訳現場のフィードバック、その他の派生的効果の点からアクション・リサーチを行い、その多面的教育効果の達成度合いについて検証した論文。(宮元)

瀧澤正巳 (2002) 「語学強化法としての通訳訓練法とその応用例」『北陸大学紀要』26 号, pp. 63-72.

<http://www.hokuriku-u.ac.jp/library/pdf/kiyo26/gai3.pdf>

通訳訓練法の中でも語学訓練に役立つと考えられる訓練法を概観し、併せてその訓練法を取り入れた具体的な学習メニューを提示している。(友野)

田中深雪 (2004) 「『通訳訓練法』を利用した大学での英語教育の実際と問題点」『通訳研究』第 4 号, pp. 63-82.

通訳教育や通訳教育を利用した語学教育を行っている大学において指導者が留意しなければいけない問題を論じている。実践している授業の内容、使用テキスト、評価方法を紹介し、さらに学生へのアンケート結果から、受講者へ授業内容を事前に周知させること、受講者の習熟度を十分考慮すること、他の英語科目との連携を推進することなどが必要であるといういくつかの提案を行っている。(西村)

新崎隆子 (2005) 「教育実践報告 英日逐次通訳プロセスを応用した英語学習」『通訳研究』第 5 号, pp. 183-201.

英日逐次通訳プロセスを応用し、英語を聞いて英語で発話する練習を英語学習の一つの方法として推奨。これを Dynamic Listening and Speaking (DLS) Method と呼び、注意を集中しながら行うリスニング力や他者に伝えるためのスピーキング力が向上し、かつ授業中の英語音声体験が増加する効果が期待されるとする。DLS セミナー受講者にアンケートを実施し、体験者の感想も分析している。(西村)

Sean, O. (2008). Student Motivation in an Interpreting and Translation Skills Class. 『JACET 中部支部紀要』第 6 号, pp. 51-61.

通訳翻訳を用いたビジネスの疑似体験 ESP 授業に対し受講者に高いモチベーションがあることがアンケートからわかった。また、実際の授業に対しても、高い満足度が得られたと報告している。(西村)

飯塚秀樹 (2009) 「通訳訓練法による英語力向上の有意性と語学指導への応用—最新の SLA 研究の視座を交えて—」『通訳翻訳研究』第 9 号, pp. 107-122.

通訳訓練法が日本人学生の語学力向上にどのように貢献しているかを SLA 研究の知見から理論的に根拠を探究しようとしたもの。シャドーイングについてはリスニング能力の一部のみを強化するものであるとし、それに top-down 的な認知処理を組み入れれば効果があるという。また、統語的知識を高められる reproduction も効果があるとし、こ

の2つの技法の組み合わせが有効な指導法になる可能性を示唆している。(西村)

中込知子 (2009) 「意識調査に見る通訳訓練法を取り入れた英語教育の効果と問題点」『国際経営・文化研究』 Vol. 14, No. 1, pp. 35-48.

通訳訓練法を取り入れた英語教育授業における効果と問題点を、学生への意識調査を通して考察した論文。学生の履修理由の半数以上が英語運用能力向上を目的としており、その意味では学生のニーズにあう訓練法の提供ができているが、一方で指導法が確立されていないこと及び学生の英語能力に合わせて訓練法を修正していくことの必要性を指摘している。(宮元)

篠塚勝正 (2009) 「大学英語教育における通訳訓練法の考察」『成城英文学』 33 号, pp. 31-49.

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007318704eng-033-03.pdf>

大学生の初級、中級、上級英語学習者に対し、スラッシュリーディング、シャドーイング、サイトトランスレーションの手法を使った教育を行った。その後、学習者にアンケート調査を行い、難しいと感じた点を分析した。中級者、上級者には受け入れられ、一定の効果がある一方で、初級者には困難な点が多く、教材選択にあたっては細心の注意が必要と結論つけている。(友野)

飯塚秀樹 (2010) 「Consecutive Interpreting Approach によるプロソディー重視の指導法が第二言語習得に与える影響」『通訳翻訳研究』 第 10 号, pp. 39-58.

L1、L2 でのリプロダクションとシャドーイングを統合した Consecutive Interpreting Approach という指導法を構築し、約3カ月にわたる実践・検証活動を行い、これを論じたもの。前半は飯塚 (2009) に続き、通訳法を扱った SLA 研究を考察し、その中から統計的に優位とされた手法を組み合わせることで本指導法を導き出したこと、そして原型をさらに改良したモデルを構築するに至ったことが述べられている。(西村)

篠塚勝正 (2010) 「英語教授法としての通訳訓練法と文法読訳法の差異 認知言語学見地から」『成城英文学』 34 号, pp. 17-37.

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007589188eng-034-02.pdf>

初級と中級レベルの大学英語学習者に対し、通訳訓練法(主にスラッシュリーディング、シャドーイング)と文法読訳法を使った英語教育を施し、教育前と後で TOEIC スコアの伸びを比較した。初級、中級レベルともに前者のグループの伸び率の方が大きかった原因を認知言語学の見地から考察している。(友野)

中村幸子 (2011) 「グローバル英語学科通訳教育アクション・リサーチ—自律した学習者を育成することを目的として—」『愛知学院大学文学部紀要』 第 40 号, pp. 129-138.

英語を専攻する2～3年生を対象とした専門科目としての通訳・翻訳の授業を通じて、学生を受動的で保守的な学習者から問題解決のために自分で意思決定をする自律的な学習

者に育てるための試みを論じた実践的な論文。平均的な英語力を有し、通訳・翻訳訓練を初めて受ける大学生に共通する様々な問題が同定されている。それらの問題は、学習への意識や態度を根源としていることが示唆され、初学の学習者に半年や1年程度の学習期間で飛躍的な通訳・翻訳力の向上を求めることは現実的ではないこと、むしろ通訳・翻訳の授業を通じて自分の学習への責任意識を芽生えさせ、学習への意識改革をもたらすことの意義が論じられている。(中村)

- その他、以下の文献もある。(西村)
- 萩原直之 (1983) 「日本の大学レベルの英語聴解訓練への逐次・同時通訳的観点および技法の導入—その理論的根拠と実践-1-」『大阪府立大学紀要人文・社会科学』 (31), pp. 131-144.
- 萩原直之 (1983) 「日本の大学レベルの英語聴解訓練への逐次・同時通訳的観点および技法の導入—その理論的根拠と実践-2-」『大阪府立大学紀要英米文学』 (31), pp. 138-164.
- 萩原直之 (1984) 「日本の大学レベルの英語聴解訓練への逐次・同時通訳的観点および技法の導入—その理論的根拠と実践-3-」『大阪府立大学紀要英米文学』 (32), pp. 97-116.
- 萩原直之 (1985) 「日本の大学レベルの英語聴解訓練への逐次・同時通訳的観点および技法の導入—その理論的根拠と実践-4-」『大阪府立大学紀要英米文学』 (33), pp. 69-94.
- 渡部昇一[研究代表者] (1991) 『外国語教育の一環としての通訳者養成のための教育内容方法の開発に関する総合的研究』 文部省助成科学研究報告書
- 玉井健 (1992) 「“follow-up” の聴解力向上に及ぼす効果および “follow-up” 能力と聴解力の関係」『STEP Bulletin』 vol. 4, pp. 48-62.
- 玉井健 (2002) 「リスニング力向上におけるシャドーイングの効果について—日本通訳学会第3回年次大会 講演 (2002年9月23日)」『通訳研究』第2号, pp. 178-192.
- 池邊裕司 (2004) 「Reproduction を用いた英語表現能力の育成」(財) 日本英語検定協会『STEP Bulletin』 vol. 16, pp. 146-152.
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』 風間書房
- 鈴木久実 (2007) 「シャドーイングを用いた英語聴解力向上の指導についての検証」『STEP Bulletin』 vol. 19, pp. 112-124.
- 飯塚秀樹 (2010) 「逐次通訳メソッドによるアウトプット練習が英語コミュニケーション能力に与える影響—リプロダクションとシャドーイングを統合した授業から—」(財) 日本英語検定協会『STEP Bulletin』 vol. 22.

英語文献

Hill, J. K. (1979). Consecutive Interpreting in Advanced Language Work. *Meta*. vol. 24. n. 4.

pp. 442-50.

英語を母語とする社会科学専攻の学生への仏語教育の一環として、上級学習者に対して逐次通訳を導入した授業について考察した論文。両言語の知識強化、二ヶ国語間のアイディアの迅速な転置、幅広い一般的知識の獲得、対象言語の使用国及びその文化に対する深い洞察力、議論のメインポイントを把握する分析力など広範なスキルが要求されるため学生のモチベーションが高まり、学習段階が上がるにつれて失われがちな限界能率 (marginal efficiency) を保持する可能性について言及している。(宮元)

Munro, J. (1999). Interpreting as a Teaching Tool. *The Language Learning Journal*. Volume 20. Issue 1.

言語コミュニケーション能力を構成する要素の内、特に語彙文法、社会言語学、ディスコースに焦点を当て、これらの要素の能力向上に資する授業内のツールとして上級外国語学習者の授業にリエゾン通訳訓練を導入、その成果について考察した論文。(宮元)

Takimoto, M. & Hashimoto, H. (2011). Intercultural Language Learning through Translation and Interpreting: A Study of Advanced-Level Japanese Learners. *Babel*, vol. 45. n. 2-3. pp. 11-16.

オーストラリアの大学における日本語教育上級クラスにおいて、分析的枠組みとしてのICLL (Intercultural Language Learning : 文化間言語学習) に基づく通訳・翻訳教育を実践した学生の学習体験について調査し、その効果について考察した論文。(宮元)

また、シャドーイングの英語 (外国語) 教育研究への応用で、以下の文献もある。(河原)

- 船山仲他 [研究代表者] (1998) 『シャドーイングの応用研究』 日本時事英語学会関西支部同時通訳論研究分科会
- 門田修平 (2007) 『シャドーイングと音読の科学』 コスモピア
- 門田修平 (2012) 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』 コスモピア
- 鈴木寿一・門田修平 (2012) 『英語音読指導ハンドブックーフォニックスからシャドーイングまで』 大修館書店

(b) 通訳スキルの養成 (中村幸子)

【概観】 英語教育への応用に関する論文は数が増えてきているが、実質的な通訳教育あるいは通訳訓練法に関する論文数は依然として圧倒的に海外からの発信が多い。海外の論文はその国や地域の通訳事情や言語政策を反映したものが主流である。(例えば、手話通訳教育に関する論文は圧倒的に海外から多く発信されているが、このカテゴリーでは取り上げていない。) 日本では通訳訓練は主としてプロ養成を専門とする通訳スクールで行われ、大学での通訳教育は主として英語教育の一環として行われてきたという経緯もあり、日本の

通訳教育研究者からの発信は主として英語教育への応用という文脈が多かったのだと推察される。ここに挙げた3点は、それぞれ英語教育への応用というよりは執筆者独自の環境の中での通訳教育の有りようをとらえた知見に富んだ内容である。(中村)

中村幸子 (2006) 「コンピュータ教室を利用した通訳訓練法」『JACET 中部支部紀要』 No. 4, pp. 51-62

CALL システムが利用できない環境でも、通常の PC 教室でマイク付きヘッドフォン、学内 LAN などがあれば、通訳訓練が可能であることを論じている。この論文が発表された時に比べ、教育現場での ICT 技術の進歩は目覚ましい。通訳担当教員はそのような技術革新をうまく活用できなければ、その利点を学生のために生かしきれないおそれがある。教員側も努力せねばなるまい。(中村)

田中深雪 (2008) 「基礎的な通訳訓練への L2 リスニング・スキルの導入について—外国語教授法からの知見の応用の可能性」『通訳翻訳研究』第 8 号, pp. 57-72

通訳教育をめぐる内外の動向を踏まえた上で、通訳訓練法に SLA の知見や発達心理学に基づく指導法を取り入れることを提案。通訳の授業においてこれまで伝統的に踏襲されてきたリスニング指導法に疑問を投げかけ、より蓄積の大きい外国語教授法や SLA 理論によるリスニング指導法の知見にも目を向けることを提唱している。(中村)

加藤澄恵 (2009) 「航空英語能力証明修得を目指したリスニング指導の考察」千葉大学言語教育センター『言語文化論叢』(3), pp. 47-59

航空管制官等のリスニング力育成にシャドーイング訓練を導入し、実験を行った結果、ICAO が求めるリスニング力到達に一定の成果を上げたことを示唆する論文。(中村)

英語文献

Gile, D. (1992). Basic Theoretical Components for Interpreter and Translator Training. In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting: Training, Talent and Experience*. (pp. 185-94). Amsterdam and Philadelphia; John Benjamins.

限られた時間でプロを養成しなければならない状況の中で、理論を教えることが有効かどうかという議論がある。教えるとすればどのような理論をどのような手順で何を目的として教えるべきか。通訳教育のための様々な通訳のモデルが紹介されている。(中村)

Harris, B. (1992). *Teaching Interpreting: A Canadian Experience*. In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting: Training, Talent and Experience*. (pp. 259-68). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

オタワ大学通訳翻訳コースの紹介。カナダでは翻訳に比べ通訳訓練を提供している機関が少ない。大学での通訳教育は翻訳教育への橋渡しの導入教育でしかなく、通訳者になりたい若者はアメリカやヨーロッパに留学するしか方法がない。またカナダでは修士

課程は純粋にアカデミック志向であるため、大学院での通訳訓練もそぐわないとしている。そもそも外国語自体が中学ではほとんど教えられていないため、英語とフランス語以外の言語ができる人が国内ではなかなか見つからないという事情もあり、カナダでの通訳教育は非常に制約の多い中で行われているといえる。(中村)

Kalina, S. (1992). Discourse Processing and Interpreting Strategies – An Approach to the Teaching of Interpreting. In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting: Training, Talent and Experience*. (pp. 251-57). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

通訳の方略について述べられ、そうした技術を養成する通訳訓練法として、談話処理 (discourse processing) の有用性を説く。談話を瞬時に処理する方略は特に同時通訳に必要であるため、比較的早い段階から同時通訳訓練を行い、サイトトランスレーションをはじめとする様々な談話処理方略を会得させることが必要と述べる。(中村)

Kurz, I. (1992). ‘Shadowing’ Exercises in Interpreter Training. In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting: Training, Talent and Experience*. (pp. 245-50). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

同時通訳の訓練に取り入れられているシャドーイングは言語変換を伴わない monolingual なドリルであるとの仮定のもとに、その効果について調べるため神経心理学の知見を援用した比較実験を行った。結果は、Why questions に答えさせるドリルが同時通訳ドリルを行ったグループと最も近い正解率が得られたというもの。(中村)

Lang, M. F. (1992). Common Ground in Teaching Translation and Interpreting: Discourse Analysis Techniques. In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting: Training, Talent and Experience*. (pp. 205-208). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

エジンバラの Heriot-Watt 大学での通訳翻訳コースでは1年次から通訳翻訳コースが行われている。どのような訓練がどのような学生を対象になされているのかが詳細に述べられている。その中でも特に談話分析が通訳翻訳教育に適していると述べている。(中村)

Padilla, P. & Martin, A. (1992). Similarities and Differences between Interpreting and Translation: Implications for Teaching. In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting*. (pp. 195-203). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

スペイン・グラナダ大学 EUTI での通訳翻訳教育事情。Renfer (2002) と同様、スペイン国内で採用されている4つの履修モデルが示されている。EUTI では Y モデルが採用されている。(中村)

Renter, C. (1992). Translator and Interpreter Training: A Case Study for a Two-Tier System

In C. Dollerup & A. Loddergaard (Eds.). *Teaching Translation and Interpreting*. (pp. 173-84). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

スイスの通訳翻訳教育事情に関する論文。チューリッヒ大学の通訳翻訳コースで行われている通訳・翻訳の訓練カリキュラムに関する4つのモデルが提示されている。それらは、2段階方式 (two-tier system)、並行方式 (run in parallel)、Yモデル (Y-model)、大学院およびOJTモデル (post graduate & intensive OJT model) などである。2段階システムにおいては、同じ学習者が最初に翻訳トレーニングを受け、試験に合格すれば次に通訳トレーニングへ進むという履修モデルが主流である。欠点は履修終了までに時間がかかる点である。並行方式では翻訳訓練と通訳訓練は別々のプログラムであり、通訳になりたい人は通訳のみ訓練が受けられ、短期間でコースを修了することができる。欠点は、短期コースであるため、2段階方式で提供される政治経済や法などの一般教養的のレクチャーは行われない。そのため、ある程度そうしたバックグラウンドは修得している社会人に適している。著者はYモデルを推奨する。はじめに通訳翻訳の共通部分を学び、その後適性試験を経て通訳モデルか翻訳モデルへ進むというモデルである。4つめのモデルは大学院生向けに行われている履修モデルである。通訳のみに特化した非常にインテンシブなプログラムであるため、ヨーロッパでも一握りの人しか適していないという。(中村)

Kalina, S. (2000). *Interpreting Competences as a Basis and a Goal for Teaching. Interpreters' Newsletter*. 10. pp. 3-32.

プロの通訳者に必要な言語運用能力等の基本的能力について述べた後、戦略的テキスト分析能力の重要性を論じている。次に、通訳訓練の歴史を概観している。教育に関する記述としては、戦略的テキスト分析能力を開発・評価するための教育システムと指導者の必要性が述べられている。通訳学・翻訳学などの研究の側面にも触れた後、通訳教育にシステムティックな教育プロセスが不足していることを指摘している。通訳・翻訳に関わる非常に包括的なテーマを扱った論文である。(中村)

Sawyer, D. B. (2001). *The Integration of Curriculum and Assessment in Interpreter Education: A Case Study*. Ph.D dissertation, University of Mainz.

<http://archimed.uni-mainz.de/pub/2001/0097/diss.pdf>

592 ページにもわたる博士論文。通訳教育カリキュラムのデザインと評価システムが詳細に論じられ、文献情報も豊富である。通訳コース開発と評価法に関心のある研究者には格好のリソースとなる。(中村)

Pippa, S. & Russo, M. (2002). *Aptitude for Conference Interpreting: A Proposal for a Testing Methodology Based on Paraphrase*. In G. Garzone & M. Viezzi (Eds.). *Interpreting in the 21st Century*. (pp. 245-56). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

ジョージタウン大学、オタワ大学の他、多くのヨーロッパの大学の通訳翻訳コースを概

観した後、必要な適性検査の詳細を述べている。著者が提案するのは、パラフレーズ能力を使った適性検査である。パラフレーズ能力と様々な認知言語能力との関連を示す分析が述べられている。(中村)

Santilli, F. (2002). The Role of Linguistics in the Interpreter's Curriculum. In G. Garzone & M. Viezzi. (Eds.). *Interpreting in the 21st Century*. (pp. 257-66). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

イタリアの大学学部レベルでの通訳教育カリキュラムに、言語学を取り入れることを提案している。筆者は通訳された16のテキストをコーパス化し、それらのテキスト結束性(textual cohesion)とシグナリング(signaling)を分析した結果プロの通訳者だけが、すべてのコンテキストにおいて、結束性に富んだ通訳を行ったことがわかった。結束性のある論理的な文章構造を生成する能力を通訳訓練に取り入れることを推奨している。(中村)

その他、以下もある。(中村)

Viaggio, S. (2002). The Quest for Optimal Relevance: The Need To Equip Students with a Pragmatic Compass. In G. Garzone & M. Viezzi (Eds.). *Interpreting in the 21st Century: Challenges and Opportunities*. (pp.229-44). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

(c) 通訳者の養成 (稲生衣代)

【概観】ここでは、理論的側面を意識しつつ通訳者に必要なスキルを習得するために有用な方法を伝える基本書や通訳現場の様子を明らかにするデータベース的な価値がある書籍を選んだ。通訳の基礎訓練を概観した基本書、逐次通訳にとって必要なノートテイキングの基本をおさえた参考書、プロ通訳者ならば迷うことなくスラスラと訳出したい挨拶などスピーチの基本を習得できる実践的な文献を紹介すると同時に、通訳者としてプロデビューを目指す者にとって必要な最新の市場の動向を収めた文献も加えた。現場で通訳者に求められる条件や通訳行為が必要となる現場の様子を十二分に踏まえた上で執筆されている場合が多く、通訳者にとって必須の基本要素を把握することができるであろう。(稲生)

Seleskovitch, D. (1968). *L'interprete dans les Conferences Internationales*. Letters Modernes.

邦訳 (ベルジュロ伊藤宏美訳) 『「会議通訳者」国際会議における通訳』 研究社

ダニッツァ・セレスコヴィッチが1968年に自己の逐次通訳・同時通訳実践についての考察をまとめたもの。その後出版された「ことば・言語・記憶：逐次通訳のノート取りの研究」とともに「意味の理論」(Theorie Interpretative de la Traduction)として通訳を目指す者、指導する者に読み継がれている。(中村)

BS 放送通訳グループ (1998)『放送通訳の世界』アルク新書 8

放送通訳者を目指す者にとっての基本書。放送通訳の現場の様子を伝え、ジャーナリズムの基本ルールを守りながら通訳する方法を明かしている。(稲生)

Moser-Mercer, B., Frauenfelder, U., Casado, B., & Künzli, A. (2000). Searching to Define Expertise in Interpreting. In K. Hyltenstam & B. Englund-Dimitrova (Eds.). *Language Processing and Simultaneous Interpreting*. (pp. 107-132). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

通訳の専門性を解明するために通訳の初心者と熟練者の差を、シャドーイング・遅延聴覚フィードバック・言語流暢性検査の3実験を通じ明らかにしようとした研究論文。(稲生)

Phelan, M. (2001). *The Interpreter's Resource*. Clevedon: Multilingual Matters.

本書は通訳の歴史、種類、倫理、組織などについて簡潔にまとめた上でプロ通訳者を目指す者あるいはすでに現場に出ている者に指針を与えるための資料を盛り込んでいる。(稲生)

Jones, R. (2002). *Conference Interpreting Explained*. Manchester: St. Jerome.

邦訳 (ウィンター良子・松縄順子訳)『会議通訳』(松柏社)

逐次通訳の基本、ノートテイキング、同時通訳を含む5章からなる実務家が執筆した本書は通訳者や学習者のみならず、通訳に関心がある層も意識して書かれているため、親切な作りになっている。(稲生)

Gillies, A. (2005). *Note-Taking for Consecutive Interpreting*. Manchester: St. Jerome.

「ノートテイキング・システムの基本」、「システムを補完する考え」、「メモのサンプルなどの資料」の3つの柱から構成されている本書は逐次通訳に不可欠なノートテイキングについて理論面・実践面から解説。(稲生)

Nolan J. (2005). *Interpretation: Techniques and Exercises*. Clevedon: Multilingual Matters.

国連通訳者の経験がある著書が通訳者・通訳訓練生向けにまとめたハンドブック。通訳者にとって必要なスキルについて概観し、その習得を可能にする練習問題も多数揃えられている。(稲生)

ピンカートン睦子・篠田顕子 (2005)『英語スピーチ通訳』大修館書店

日本語および英語のあいさつの特徴をふまえながら、ビジネススピーチの訳出スキル習得を目指す学習本。通訳にあたる際、あいさつから訳出を始めることが多いため、その準備のために一通り練習できるよう工夫されている。(稲生)

Kearns, J. (2008). The Academic and the Vocational in Translator Education. In J. Kearns (Ed.). *Translator and Interpreter Training. Issues, Methods and Debates.* (pp. 184-214). London: Continuum International.

通訳教育における理論あるいは実践の二分法について先行研究を踏まえながら考察し、カリキュラムデザインの重要性を明らかにしている論文。(稲生)

Gile, D. (2009). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training.* (Revised Edition.). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

邦訳 (田辺希久子・中村昌弘・松縄順子訳) 『通訳翻訳訓練：基本的概念とモデル』 (みすず書房)

通訳者を目指す者、通訳教育にかかわる者の必読書で、通訳翻訳訓練の基本書。1995年の第1版に最新の動向を加筆した改訂版。第1章では通訳翻訳訓練の理論について、また最後の第10章では、訓練にもっと理論的側面を導入するように論じている点が注目。(稲生)

1995年に出版された通訳・翻訳訓練に関する理論的な解説書の改訂版である。通訳・翻訳訓練を行う人、あるいは研究者にとっては基本書の一つとも言える。(田中)

『通訳者・翻訳者になる本』イカロス出版

業界の最新動向を示し特集やプロのインタビューを通じ通訳・翻訳の世界について解説。通訳者養成機関や通訳エージェントのデータベースが掲載されている。年に1回発行。(稲生)

その他、以下の文献もある。(河原)

- 日本通訳協会 (1981) 『通訳訓練テープ講座』 (第1巻～第10巻) 至誠堂
- 篠田顕子・新崎隆子 (1992) 『英語は女を変える—同時通訳者が見たコミュニケーションの不思議』 はまの出版
- 原不二子 (1994) 『通訳という仕事』 ジャパンタイムズ
- アルク編 (1995) 『通訳の仕事—通訳者になりたい人のための入門書』 アルク
- 篠田顕子・新崎隆子 (1995) 『ボランティア英語のすすめ—高校生からお年寄りまで』 はまの出版
- 小林淳夫 (1996) 『通訳の極意—達人のテクニックとトレーニング方法南雲堂フェニックス』
- 鳥飼玖美子 (1998) 『ことばが招く国際摩擦』 ジャパンタイムズ
- 小林薫 (1999) 『英語通訳の勘どころ 体験的通訳論』 丸善
- 水野真木子 (2001) 『通訳のジレンマ—通訳になりたい人と通訳を雇いたい人のためのコミュニケーション論』 日本図書刊行会
- 新崎隆子 (2001) 『通訳席から世界が見える』 筑摩書房
- スーザン小山 (2001) 『電話通訳—息づかいから感じる日米文化比較』 現代書館

- 遠山豊子 (2001)『入門 通訳を仕事にしたい人の本』中経出版
- 鳥飼玖美子 (2001)『歴史をかえた誤訳』新潮文庫
- 小松達也 (2003)『通訳の英語 日本語』文春新書
- 原不二子 (2004)『通訳ブースから見る世界』ジャパンタイムズ
- 田中深雪・鶴田知佳子・稲生衣代・河原清志 (2005)「DVD で見て、聞いて、体験する実践講座 通訳訓練編」『通訳&通訳ガイドの仕事』イカロス出版, pp. 71-100.
- 鶴田知佳子・河原清志 (2005)『同時通訳の最前線から学ぶ ここまで使える超基本単語 50』コスモピア
- 米原万里 (2006)『不実な美女か貞淑な醜女か』新潮社
- 鳥飼玖美子 (2007)『通訳者と戦後日米外交』みすず書房
- ベルジュロ伊藤宏美・鶴田知佳子・内藤稔 (2009)『よくわかる逐次通訳』東京外国語大学出版会
- 小林禮子 (2009)『エンタメ通訳の聞き方・話し方』PHP 研究所
- 近藤正臣 (2009)『通訳者のしごと』岩波ジュニア新書
- 松縄順子監修 (2009)『East Meets West : 国際シンポジウム講演集』エンタイトル出版
- 「ほっかいどうの通訳者たち」編集委員会 (2010)『ほっかいどうの通訳者たち』イベント・コンベンション・プロ
- 稲生衣代・河原清志 (2010)「通訳スキルの身につけ方」イカロス出版 通訳翻訳ジャーナル編集部『通訳の仕事 始め方・稼ぎ方』イカロス出版, pp. 56-75.
- 法学書院編集部編 (2012)『通訳をめざす人へ』法学書院
- 鳥飼玖美子 (2013)『戦後史の中の英語と私』みすず書房

(d) 異文化コミュニケーション論の視点 (新崎隆子)

【概観】通訳者は言語を異にする話者の間の相互理解を助ける役割を担う。言語使用が文化に根ざしていることを考えれば、通訳者に文化の仲介者としての意識が必要であることは言うまでもない。しかし、異文化コミュニケーションの視点から通訳を論じた文献は少なく、その中で通訳教育に役立つと思われるものはさらに少ない。ここでは、大学における通訳教育を念頭に、①異文化コミュニケーションの視点から通訳を論じ、教育に役立つ文献、②日本語と英語の違いに焦点を当て、日本語と英語の間の通訳の授業に役立つ文献、③異文化コミュニケーションを理解するための副読本として学生に推奨できる文献、の三つに分けて紹介する。(新崎)

①異文化コミュニケーションの視点から通訳を論じ、教育に役立つ文献

Angelelli, C. (2000). Interpretation as a Communicative Event: A Look through Hymes' Lenses. *Meta*. XLV. 4. pp. 580-92.

通訳と一口に言っても、色々な状況がある。この論文はハイムズ理論を用い、通訳事象 communicative event として分析することで、通訳パフォーマンスの様々な要件 (requirement)を明らかにし、通訳者はコミュニケーションアクトの構成要素について異なる理解をする必要があると解いている。(新崎)

Levine, P. (2002). A Teaching Methodology with Examples of the Kinds of Cultural Recognition Needed for Translators and Interpreters in Hong Kong. In E. Hung (Ed.). *Teaching Translation and Interpreting 4: Building bridges*. (pp. 145-54). Amsterdam and New York: John Benjamins Publishing Company.

翻訳者や通訳者に必要な文化的認識の実例を用いた教授法について述べている。(新崎)

Schäffner, C. (2003). Translation and Intercultural Communication: Similarities and Differences. *Studies in Communication Sciences*. 3/2 (2003). pp. 79-107.

この論文は「通訳」ではなく「翻訳」を扱っているが、「通訳」と共通する部分が多い。一番の収穫は、普通の異文化コミュニケーションが自分の目的を果たすものであるのに対し、翻訳は他者の目的を果たすものであるという違いを明確に説明している点である。また、翻訳者になる前提とされていた「文化能力」は訓練によって開発すべきものとし、ドイツ語の翻訳の授業を紹介している。文化特異的な話題の翻訳を通して、学生がこれまで当たり前だと思っていたことに文化的な背景があるという気づきを得るプロセスは、通訳の授業でも見られることである。この論文は、翻訳が異文化コミュニケーションと多くの共通点があるにもかかわらず異文化コミュニケーションの研究者からは単なる言語現象としか扱われていないことを批判している。(新崎)

Pistillo, G. (2003-2004). The Interpreter as Cultural Mediator. In J. Allwood (Ed.). *Journal of Intercultural Communication*. (2003-2004), Issue 6.

<http://www.immi.se/intercultural/nr6/pistillo.htm> (April 13, 2007).

ビジネス通訳において通訳者の異文化間感受性と能力がより良い相互理解を促すことを論じている。イタリア人とアメリカ人のビジネスコミュニケーションの事例が分析されており、興味深い。(新崎)

Katan D. (2004). *Translating Cultures: An Introduction for Translators, Interpreters and Mediators*. (Second edition). Manchester: St. Jerome Publishing.

翻訳者、通訳者、異文化間の仲介に携わる人たちに「文化を訳す」という視点を教えることを目的として書かれたもの。異文化コミュニケーションの分野で扱われる主な理論が翻訳や通訳と関連付けて解説されている。教師が重要だと思う箇所をプリントして配布し解説すれば、通訳を単純な単語の置き換えだと捉えがちな学生たちの意識を変えるのに役立つだろう。インターネットで書評も読める。(新崎)

新崎隆子 (2004) 『日本語の発話：異文化間コミュニケーションの視点から』 修士論文、青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻提出

日本語から英語に通訳する際の難しさを日本語のコミュニケーションスタイルの特徴の視点から分析している。(新崎)

稲生衣代・染谷泰正 (2005) 「通訳教育の新しいパラダイム—異文化コミュニケーションの視点に立った通訳教育のための試論」 『通訳研究』 第5号, pp.73-109.

通訳者に必要なコミュニケーション能力を6つの側面から論じている。(新崎)

Baker, M. (2006). Contextualization in Translator- and Interpreter-Mediated Events. *Journal of Pragmatics*. 38. pp. 321-37.

<http://www.elsevier.com/locate/pragma> (retrieved April 16, 2007)

通訳や翻訳におけるコンテクスト化のプロセスに焦点を当て、通訳者や翻訳者が他者とのインターアクションに様々なやり方で枠組みを与えていると論じている。通訳者の役割を考える上で参考になる。(新崎)

新崎隆子 (2007) 「異文化コミュニケーション能力の修得プロセス～通訳演習参加者の事例より～」 『通訳研究』 第7号

大学の通訳演習の参加者の事例に基づき、通訳授業の異文化コミュニケーション教育としての可能性を探っている。(新崎)

新崎隆子 (2010) 『通訳のコミュニケーション調整仮説：英日逐次通訳の事例から』 博士論文、青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻提出

コミュニケーション調整理論の視点から、通訳者の役割を論じている。(新崎)

Schäffner, C. (2012). Crosscultural Translation and Conflicting Ideologies. In M. Muñoz-Calvo & C. B. Gómez. (Eds.). *Translation and Cultural Identity: Selected Essays on Translation and Cross-Cultural Communication*. (pp.108-27). Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars.

著者は異文化間コミュニケーションの視点に立った translation 研究の文献を多く発表している。この論文では translation が他文化に関する知識を形成するという立場から、ドイツの Spiegel International 誌とイギリスの BBC Monitoring Service の事例に基づき、民族・文化的アイデンティティを形成し、イデオロギーの維持に貢献する translation に携わる者の役割について問題提起している。短く読みやすい論文なので放送通訳・翻訳の授業の reading assignment に適している。(新崎)

新崎隆子・石黒弓美子(2012) 「日本語発話の解釈：CMM 理論の日英通訳指導への応用」 『通訳翻訳研究』 第12号

日本語から英語への通訳事例を分析し、日本語発話の解釈の指導における CMM 理論の有用性を示唆した。(新崎)

②日本語と英語の違いに焦点を当て、日本語と英語の間の通訳の授業に役立つ文献

Hinds, J. (1986) 『Situation vs. Person Focus. 日本語らしさと英語らしさ』(西光義弘注) くろしお出版

日本語と英語の違いを言語コミュニティの発想の違いから論じた大学生向けのテキストである。本文は英語で書かれているが、西光義弘氏の注釈が入っており、巻末には難しい英語表現に対する日本語の説明がついている。10 章からなり、1 章が 8-10 ページぐらいなので、宿題や学生の発表の教材としても適している。(新崎)

Maynard, S. K. (1997). *Japanese Communication-Language and Thought in Context*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press.

アメリカと日本の文化を、「自己の概念」「内と外」「甘え」などの観点から論じ、文化がコミュニケーションスタイルに与える影響について述べている。言語学的考察は入門レベルであり、初心者にも読みやすい内容である。(新崎)

池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚：〈ことばの意味〉のしくみ』日本放送出版協会

日本語と英語の両面からことばの〈意味〉を論じている。第 4 章ではコミュニケーションにおけることばの〈意味〉をコンテキストとの関係から解説し、P. Grice の Cooperative Principle、G.N. Leech の Politeness principle や「関連性理論」など、異文化間言語コミュニケーションの重要な理論が紹介されている。非常に平易に書かれているので、大学の教材に適している。(新崎)

③異文化コミュニケーションを理解するための副読本として学生に推奨できる文献

中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係』講談社現代新書

通訳者を目指す学生が読んでおくべき教養書である。(新崎)

Barnlund, D. C. (1973). *Public and Private Self in Japan and the United States: Communicative Styles of Two Cultures*. Tokyo: The Simul Press, Inc.

邦訳(西山千・佐野雅子訳)『日本人の表現構造：公的自己と私的自己・アメリカ人との比較』サイマル出版会

日本とアメリカの自己概念の違いがコミュニケーション行動の違いに結びついていることを示唆している。特に日本語と英語の間の通訳者を目指す者の必読書である。(新崎)

直塚玲子 (1980) 『欧米人が沈黙するとき』大修館書店

日本人と欧米人の出会いで生ずる誤解や衝突の事例を取り上げ、異文化間コミュニケー

ションの促進を探る内容。通訳者が経験する可能性のある事例も多く、読み物としても楽しめる。（新崎）

Braun, J. (1999). *Intercultural Communication in a Multicultural World*. Tokyo: Eichosha Publishing Co. Ltd.

異文化間コミュニケーションに関する大学生向けの英語のテキストとしては、内容が充実している。学部に通訳クラスの副読本として推奨できる。（新崎）

本名信行（1999）『アジアをつなぐ英語－英語の新しい国際的役割』アルク

グローバル化が進むにつれ、国際会議に参加する英語・非母語話者が増加している今、通訳者は多様な英語話者のための円滑なコミュニケーションを心がけなければならない。本名氏はこのテーマで多くの著作を発表しているが、この本は平易な入門書として学生に推薦できる。（新崎）

土居健郎（2001）『「甘え」の構造』弘文社

日本人の精神構造を論じた、異文化コミュニケーションに関する必読書。（新崎）

西田司・W.B. グディカンスト（2002）『異文化間コミュニケーション入門－日米間の相互理解のために』丸善

日米間のコミュニケーションに焦点を当て、150 ページという薄さの中で異文化コミュニケーション理論の主だったものを易しく解説している。（新崎）

末田清子・福田浩子（2003）『コミュニケーション学－その展望と視点』松柏社

異文化コミュニケーション理論が分かりやすくまとめられており、大学院レベルのコースの副読本として使用できる。（新崎）

(e) 多文化社会論の視点 （山本一晴）

【概観】多文化社会と教育に関連した論考は、異文化間教育学会や比較教育学会などの教育を専門とする学会だけでなく日本語教育学会や大学英語教育学会などの言語を専門とする学会においても数多く存在する。しかし、多文化社会と通訳、またはさらに焦点化した通訳教育となると、残念ながらその数は極めて限られる。今回紹介する 10 本の論稿は、通訳教育と関連すると思われる論稿である。公共政策の立場から通訳の実情を検討した渡辺（2011）や通訳ニーズの把握および現状を報告した愛知県（2011）などからわかる通り、通訳の実施主体やユーザーを対象にした論考を多く選定した。今後、多文化社会に向けた通訳教育がさらなる発展を遂げていくことができればという願いを込めている。なお、本分野と近接するコミュニティ通訳論では個人、対人レベルでの支援や教育についても踏み

込んで文献を紹介しているので、参照していただきたい。(山本)

Elizabeth, A. J., Donald, S. S., Jose, A. S., & Esta-Lee, S. (2004). Overcoming Language Barriers in Health Care: Costs and Benefits of Interpreter Services. *American Journal of Public Health*. 94(5). (pp. 866-69). American Public Health Association.

医療通訳サービスの財政的実現可能性について検証した論考である。通訳サービスを適用した群と適用しなかった群とに分けて、通訳サービスと医療サービスのコストを統計学的に比較分析している。この論考のように通訳コストに関する実証研究は、日本における医療通訳の実効性を考える上で有用であると思われる。(山本)

河原俊昭・野山広編 (2007)『外国人住民への言語サービス—地域社会・自治体は多言語社会をどう迎えるか』明石書店

多文化社会論において萌芽期から通訳翻訳による支援を住民サービスとしての一環として捉えることの重要性を説いている。なお、筆者の一人の河原氏は、本書の他に多文化社会における言語サービスに関して、多数の論考や著作があり、参照していただきたい。(山本)

Corsellis, A. (2008). *Public Service Interpreting: The First Step*. New York, NY: Palgrave Macmillan.

ヨーロッパにおける公的サービスとしての通訳を事例に、通訳者の役割から養成のためのコース設計、通訳評価、そしてコーディネーターへの教育も含めて幅広く検討されている。実践に向けた指導書的作用を果たしている。(山本)

浜井裕三子 (2008)「イギリスにおける『移民』マイノリティと言語 (特集 移民と言語 ①)」『ことばと社会』11号, pp. 26-47.

イギリスにおける移民と言語を取り巻く状況について考察した論考である。公的機関による多言語対応(通訳および翻訳)はその経費の増加により批判の対象になっており、縮小化が望まれているが、筆者はコミュニティ言語を多文化社会の資源として肯定的に評価し、言語支援に係るコストの抑制には慎重な措置が取られるべきと主張をする。(山本)

O'Rourke, B. & Castillo, P. (2009). "Top-down" or "Bottom-up"? Language Policies in Public Service Interpreting in the Republic of Ireland, Scotland and Spain. In R. de Pedro Ricoy, I. Perez & C. Wilson (Eds.). *Interpreting and Translating in Public Service Settings: Policy, Practice, Pedagogy*. (pp. 33-51). Manchester, U.K.: St. Jerome.

多文化社会における言語サービスを言語政策的観点から捉えた論考である。ニーズに基づくサービスの提供というボトムアップ型の通訳サービスが日本では主流であるため、大局的観点に立った言語政策、言語計画、そして言語管理に関する議論がほとんど見ら

れない。今後、言語支援のための通訳者養成を実施する上で、その方向付けを検討する際に意義があると思われる。(山本)

愛知県 (2010) 「平成 22 年度多文化共生実践モデル支援事業報告書」

<http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000042/42369/houkokushokouhan.pdf>

(2013 年 3 月 31 日アクセス)

多文化共生施策関連の支援事業の成果に関する報告書である。通訳ニーズの把握や通訳支援の在り方を考察する上で、示唆に富む率直なコメントが見られる。ここでは愛知県の報告書を挙げたが、自治体による調査報告書は、都道府県レベルだけでなく市町村レベルにおいても数多く存在するため、他の報告書も参照していただきたい。(山本)

Ozolins, U. (2010). Factors that Determine the Provision of Public Service Interpreting: Comparative Perspectives on Government Motivation and Language Service Implementation. *The Journal of Specialised Translation*. 14. pp. 194-215.

http://www.jostrans.org/issue14/art_ozolins.php (2013 年 3 月 31 日アクセス)

個別の国の事例を挙げて検討するミクロな視点からの論考は多く存在するが、本論考はマクロな視点から世界各国の公的サービスとしての通訳に対する政策的姿勢や移民への対応等について比較検討している。政策と通訳サービスとの関連性を強く意識させる内容となっている。(山本)

Valero-Garcés, C. (2010). The Difficult Task of Gathering Information on PSI&T. *Babel*. 56 (3). (pp. 199-218). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

公的サービスとしての通訳および翻訳に関する情報を得る際、困難性が伴うものである。本論考はこの課題について、情報のリソースを証拠として列挙しながら通訳者、サービス提供者、そして各国の事情に合わせてその要因を分析している。(山本)

工藤正子 (2011) 「移民女性の働き方にみるジェンダーとエスニシティ—パキスタン系イギリス女性のコミュニティ・ワークを中心に」 竹沢尚一郎編『移民のヨーロッパ—国際比較の視点から』 (pp. 172-197) 明石書店

「コミュニティ・ワーク」を地域社会への参画や住民のエンパワーメントの促進につながる重要な活動と捉え、移民女性の生活戦略の一端を描いている。移民女性へのインタビューを通して、学校現場での通訳活動についての語りが見られる。(山本)

渡辺博顕 (2011) 『調査シリーズ No.87 地方自治体における外国人の定住・就労支援への取組みに関する調査』 独立行政法人労働政策研究・研究機構

<http://www.jil.go.jp/institute/research/2011/documents/087.pdf> (2013 年 3 月 31 日アクセス)

地方自治体を対象に外国人の受入れに伴う費用を調査し、比較分析した報告書である。定住支援に向けた言語支援に係る費用が経時的に提示されており、予算配分の傾向をう

かがうことができる。コミュニティ分野における通訳者養成の観点から企画・運営を行う者にとって意義がある。(山本)

(f) コミュニティ通訳の視点 (内藤稔)

【概観】世界各国において多文化化が進行するなか、コミュニティ通訳の社会的意義が高まりをみせている。コミュニティ通訳に携わる人材が置かれる環境は、国により異なりがあると考えられるが、通訳者に求められる役割や専門性、およびその訓練方法については、一定の共通項を見出し、通訳教育研究の現場において議論・検討を進めていくことが可能であろう。以下、まずは日本社会において現状考えられるコミュニティ通訳の視点にもとづき、各専門領域の内実をとらえた文献を紹介する。その後、世界各地においてみられる本領域での議論を広範に紹介し、あるいは国内との比較を通じて、今後のコミュニティ通訳研究における論点の整理と把握に役立てたい。(内藤)

最高裁判所事務総局刑事局監修 (1993)『法廷通訳ハンドブック【英語】(補訂版)』法曹会

刑事手続の流れや通訳に当たっての注意事項、並びに法律用語を把握するのに適したハンドブック。英語を含め、イタリア語やウルドゥー語、ドイツ語、フランス語、ベンガル語、ミャンマー語の計7言語で刊行されている。(内藤)

河原俊昭編 (2004)『自治体の言語サービス——多言語社会への扉をひらく』春風社

全国各地の自治体による、在住外国人を対象とした「言語サービス」の取り組みとその実態を取り上げた一冊。今後ニーズの高まりが予想される行政場面での通訳・翻訳行為のあり方や担い手の育成方法を議論するうえでの土台となる。また外国につながる子どもたちへの日本語教室や母語保障についての論考もあり、多文化社会における通訳との広い意味での関連性を探ることができる。(内藤)

渡辺修・長尾ひろみ・水野真木子 (2004)『司法通訳 Q&A で学ぶ通訳現場』松柏社

「司法通訳人」が実践の場に身を置きながら学びを深め、司法通訳の質の向上を図ることを狙いとした一冊。司法通訳人のプロフェッショナル化に当たり必要とされる要素である、法律の基本知識、専門用語と異文化表現の通訳技法、並びに通訳人の職業倫理の習得に焦点を当てている。(内藤)

真田伸治・庄司博史編 (2005)『事典 日本の多言語社会』岩波書店

多言語・多文化化が進行する日本国内において、コミュニティ通訳として実務に当たる際に必要なキーワードを「基本概念」、「日本の状況・政策」などの項目ごとに、詳しく取り上げている。通訳教育の場面において柱のひとつとされる、背景知識の強化への寄

与が期待される。(内藤)

連利博監修 (2007)『医療通訳入門』松柏社

医療通訳ならではの特徴をわかりやすくまとめた入門書。「総論」では米国やオーストラリアの医療通訳事情についての紹介もあるほか、「各論」では内科や外科、小児科、産婦人科など各診療科で頻出する用語や解説が記載されており、医療面での基礎知識も学ぶことができる。(内藤)

水野真木子 (2008)『コミュニティー通訳入門』大阪教育図書

日本におけるコミュニティー通訳の特徴を広く理解するのに適した概説書。司法、医療、学校、行政といった各分野において通訳者に求められる役割とその異なりを整理し、把握するうえで優れており、コミュニティー通訳の有り様を議論していく際の礎となる。(内藤)

津田守編・日本通訳翻訳学会監修 (2008)『法務通訳翻訳という仕事』大阪大学出版会

日本通訳翻訳学会第8回年次大会における特別プログラム「グローバル化する日本における法務通訳翻訳の現状と課題」を開催した際の内容を収録したものであり、日本通訳翻訳学会が監修を行った。主にユーザー、および実務者の立場から、法務通訳翻訳の特徴が描き出されており、内実を把握するのに役立つ。(内藤)

吉富志津代 (2008)『多文化共生社会と外国人コミュニティの力』現代人文社

本書では「在日外国人をとりまく社会の変容」や「移民の国際比較」など、コミュニティー通訳が基本に押さえておきたい背景知識を概観することができる。また具体的な事例をもとに、多言語による翻訳・通訳が単なる情報提供ではなく、外国人が抱える問題の「解決」に寄与することの重要性を説いており、コミュニティー通訳の役割論を議論していくうえで有用である。(内藤)

東京都外国人相談研究会 (2009)『最新外国人よろず相談 事例と回答 120』日本加除出版

「入国・在留関係」や「医療・社会保障制度」、「消費者関係」など、外国人が日々直面するさまざまな生活上の相談事例を応答形式にまとめた一冊。相談員による回答の根拠となるポイント、ならびに各事例が起こり得る背景も併記されており、特に相談通訳の教育に際して包括的な知識の体得に役立つ。(内藤)

渡辺修・水野真木子・中村幸子 (2010)『実践司法通訳 シナリオで学ぶ法廷通訳 [裁判員裁判編]』現代人文社

通訳人の付いた裁判員裁判の流れを、模擬裁判を用いて詳しく再現した一冊。「通訳人が実際に行った通訳」の検討が行われている点からも、法廷通訳の実務家、および学習者にとっても有用である。また通訳人を利用する側の法律家が裁判員裁判における通訳へ

の理解を深めるのにも適した内容となっている。(内藤)

**最高裁判所事務総局刑事局監修 (2011)『法廷通訳ハンドブック 実践編【英語】(改訂版)』
法曹会**

『法廷通訳ハンドブック』の実践編。英語を含め、インドネシア語、ウルドゥー語、韓国・朝鮮語、シンハラ語、スペイン語、タイ語、フィリピン (タガログ) 語、トルコ語、中国語、ヒンディー語、ベトナム語、ペルシャ語、ベンガル語、ポルトガル語、ミャンマー語、トルコ語の計 17 言語で刊行されている。(内藤)

その他、コミュニティ通訳・司法通訳関連で、以下の文献もある。(河原)

- 渡辺修・長尾ひろみ (1998)『外国人と刑事手続—適正な通訳のために』成文堂
- 国際通訳研究会 (2000)『警察通訳ハンドブック』立花書房
- 森悠子 (2003)『英語で証言してみませんか—法廷通訳が見たアメリカ裁判事情』アイエルエス出版
- Rudvin, M. & Tomassini, E. (2011). *Interpreting in the Community and Workplace*. Basingstoke & New York: Palgrave Macmillan.
- 多文化共生センターきょうと編 (2011)『医療通訳の実学・実技・実践』多文化共生センターきょうと
- 藤井克徳・水野真木子 (2012)『新しい福祉制度とコミュニティー通訳論』文理閣
- 橋内武・堀田秀吾編 (2012)『法と言語—法言語学へのいざない』くろしお出版
- 水野真木子・中村幸子編著 (2012)『法廷用語・表現対訳集 (日本語—英語) 法律用語編』『法廷用語・表現対訳集 (日本語—英語) 一般用語編』大阪教育図書
- ジョン・ギボンズ著、中根育子・鶴田知佳子・水野真木子・中村幸子訳 (2013)『法言語学入門—司法制度におけることば』東京外国語大学出版会
- 津田守編 (2013)『15 言語の裁判員裁判用語と解説 第 1 巻 日本語 英語 中国語 [簡体字] 中国語 [繁体字] 韓国・朝鮮語 モンゴル語』『15 言語の裁判員裁判用語と解説 第 2 巻 日本語 英語 フィリピン語 インドネシア語 ベトナム語 タイ語』『15 言語の裁判員裁判用語と解説 第 3 巻 日本語 英語 ヒンディー語 ウルドゥー語 ペルシア語 ロシア語 ポルトガル語 スペイン語』現代人文社

英語文献

Carr, S., Roberts R., Dufour A., & Steyn D. (Eds.). (1997). *The Critical Link: Interpreters in the Community*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

第 1 回クリティカルリンク国際会議に寄せられた計 22 本の論文を掲載した論文集。コミュニティ通訳の概観に始まり、役割、訓練方法、基準・評価・認定、および問題点などについて、世界各地における現場での事例とともに議論がなされており、基本理解に役立つ。(内藤)

Hale, S. (2007). *Community Interpreting*. Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan.

コミュニティ通訳の立ち位置を概観するのに優れた一冊。特に各所に通訳実践者の生の声を取り上げながら、倫理綱領や各通訳場面において直面する課題などを深掘りして分析しているところに本書の醍醐味がある。コミュニティ通訳教育の現場で涵養すべきコンピタンス、およびそれを実現するための方法論や教材についても言及がなされており、コミュニティ通訳のトレーニング方法を探求するうえで足がかりとなる。(内藤)

Valero-Garcés, C. & Martin, A. (Eds.). (2008). *Crossing Borders in Community Interpreting: Definitions and Dilemmas*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

コミュニティ通訳における役割論を探求していくうえで有用な論文集。欧米諸国において、法廷や警察機関、ヘルスケアなどの異なる専門領域で実施された調査が紹介されており、あらためて文化と文化をつなぐ通訳者にとって Mediation とは何かを考え、議論する土台が提供されている。(内藤)

Hale, S., Ozolins, U. & Stern, L. (Eds.). (2009). *The Critical Link 5: Quality in interpreting – A Shared Responsibility*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

通訳における質の問題を取り上げた 15 本の論文を掲載した論文集。質の確保に当たっては、通訳者の技術的な側面に限らず、通訳という営為におけるさまざまな参与者との協働が必要視されることを謳っており、ユーザー教育を含む、幅広い観点からの通訳教育での応用が期待できる。(内藤)

Lee, J. and Buzo, A. (2009). *Community Language Interpreting*. Sydney: The Federation Press.

オーストラリアにおける、11 分野におよぶコミュニティ通訳の各領域（社会保障とコミュニティサービス、教育、ヘルスケア、司法通訳など）が直面する社会・行政的状況の概要紹介に始まり、個々の領域で発生し得る通訳場面を想定したスクリプトをダイアログ通訳、サイトトランスレーション、逐次通訳等の形態で提示した実用的な一冊。(内藤)

Rudvin, M. & Tomassini, E. (2011). *Interpreting in the Community and Workplace: A Practical Teaching Guide*. New York: Palgrave Macmillan.

特に司法、医療セクターの通訳に焦点を当てながら、理論、および実践の両面において浮かび上がる問題点を包括的に扱った指導書。ビジネスセクターの通訳についても言及している。本書では、実際の授業運営において望まれる教授法やコースの設計方法などが具体的な形で示されており、実用的な一冊となっている。また最終章では、各セクターにつき 5 件ずつ、英語・イタリア語間のダイアログ通訳の事例が紹介されており、英語・日本語間での演習にも応用が可能と考えられる。(内藤)

(g) 対人コミュニケーション論の視点 (渡部富栄)

【概観】既存の通訳文献にある対人コミュニケーション論は、残念ながら全体として、数は少ない。かつては、シンボリック相互作用理論による通訳の説明と、通訳プロセスにおける非言語要素の考慮しかなかったのだが、1990年代以降、コミュニティー通訳者のコミュニケーション調整の役割が研究されるようになり、それを明らかにするために *dialogue* や *interaction* といった参加者との対人関係に与える通訳者の影響を部分的に調べた論文が現れてきた。

通訳はメッセージ交換に介在し次の文脈形成を左右して関係者の対人関係に影響を与える。例えば、対人配慮の意図や作用などから通訳を考えることは興味深い。対人コミュニケーションの視点は、通訳の実践と教育、そして研究に新たな展開をもたらすものであると考えられる。以下、対人コミュニケーション論について、既存の通訳文献に見られるもの（①シンボリック相互作用理論を用いたもの、②通訳場面における非言語情報の影響を検討したもの、③通訳者の対人間に与える影響に関するもの）、と、今後の通訳実践・教育・研究に有用と思われるものに分けて、文献を紹介する。（渡部）

既存の通訳文献

①シンボリック相互作用理論を用いたもの

Kirchhof, H. (1976). Simultaneous Interpreting Interdependence of Variables in the Interpreting Process, Interpreting Models and Interpreting Strategies. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.). (2002). *The Interpreting Studies Reader*. (pp. 111-19). London and New York: Routledge.

キルキーホフの三者二言語コミュニケーションシステムモデル（Three-party bilingual communication system model）として知られている。（渡部）

Ingram, R. M. (1985). Simultaneous Interpretation of Sign Language: Semiotic and Psycholinguistic Perspectives. *Multilingua*. 4 (2). pp. 91-102.

シンボリック相互作用モデルを使って通訳を説明した最初の文献である。（渡部）

Kondo, M. (2003). 3-Party 2-Language Model of Interpreting Revisited. *Forum*. 1(1). pp. 77-96.

近藤正臣（2012）「通訳原理に関する省察（上）」『通訳翻訳研究』第12号, pp. 119-32.

日本でからの論文で二言語三者モデルとして知られている。いくつか記述があるが、直近のものとしてこの2つの論文を挙げておく。（渡部）

②通訳場面における非言語要素の影響を検討したもの

Poyatos, F. (1987). Nonverbal Communication in Simultaneous and Consecutive Interpretation: A Theoretical Model and New Perspectives. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger

(Eds.). (2002). *The Interpreting Studies Reader*. (pp. 234-46). London and New York: Routledge.

Poyatos, F. (Ed.). (1997). *The Reality of Multichannel Verbal-Nonverbal Communication in Simultaneous and Consecutive Interpretation. Nonverbal Communication in Translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

この2つは、Poyatos が Heidelberg/Germersheim translation schools で行った講義内容をまとめた論文である。談話の場面では、言語、周辺言語、動作の三重構造が機能してコミュニケーションが円滑になるために、この3要素を逐次と同時の通訳で話し手と聞き手、通訳者に分けて分析し、作表している。(渡部)

Viaggio, S. (1997). *Kinesics and the Simultaneous Interpreter: The Advantages of Listening with One's Eyes and Speaking with One's Body. Nonverbal Communication in Translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

筆者は有名な通訳者で、同時通訳の実践には非言語情報の処理が必要であることを実践家の視点から説明した。通訳者は、通訳ブースから話し手と聞き手の動作(kinesics)を確認することで発話の理解を進め、訳出では自身が周辺言語を言語表現に整合させる必要があると主張する。(渡部)

③通訳者の対人間に与える影響に関するもの

Roy, C. B. (1993). The Problem with Definitions, Descriptions, and the Role Metaphors of Interpreters. *Journal of Interpretation*, 6. pp. 127-54. (reprinted in F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.). *The Interpreting Studies Reader*. (pp. 345-53). London and New York: Routledge.)

手話通訳に関するものであるが、通訳者の定義や認知されている役割の変遷を振り返り、導管モデル(通訳者の役割は言葉を置き換えるコミュニケーションのチャンネルであるというもの)に基づく、受動的なとらえ方が根強いことを指摘し、現実を反映していないとしている。通訳は積極的な第3の参加者で、話者、聴者の両方と対話のアウトカムに影響を与え、技術的というより、異文化および対人関係をベースにしたものである結論している。(渡部)

Wadensjö, C. (1993). The Double Role of a Dialogue Interpreter. *Perspectives: Studies in Translatology* 1. pp. 105-21.

Wadensjö, C. (1997). Recycled Information as a Questioning Strategy Pitfalls in Interpreter-Mediated Talk. *The Critical Link; Interpreters in the Community*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. pp. 35-52.

通訳研究において、研究対象を会議通訳からコミュニティー通訳に転換させ社会的な研究を促した大きな功績を持つとされる Wadensjö の論文2つである。主に通訳の役割を議論するときに出てくる文献である。スウェーデンの移民に対する通訳で、登録行政や

警察、病院での面接の場において、通訳者にはテキスト生成だけではなく、対人間の調整を重要な役割があり、必要であれば通訳者は訳の精度を後回しにしても、対人間の調整をすることとしている。Recycled information as a questioning strategy では、警察での質問には3つの形が繰り返し出てくると述べている。(渡部)

Alexieva, B. (1997). A Typology of Interpreter-Mediated Events. *The Translator: Studies in Intercultural Communication* 3 (2). pp.153-174.

通訳の訳出と通訳を介する場に関係する要素に分け通訳を分類し説明しており、前者では空間／距離といった非言語、後者ではパワー、フェイスワーク、協調の理論などの対人コミュニケーションの要素が挙げられている。(渡部)

Tate, G. & Turner, G. H. (1997). The Code and the Culture: Sign Language Interpreting – In Search of the New Breed’s Ethics. *Deaf World*. 13. pp. 21-26. (reprinted in F. Pöchhacker and M. Shlesinger (Eds.). (pp. 373-83). *The Interpreting Studies Reader*. London and New York: Routledge.)

通訳者には「正確」、「公平」、「誠実」という倫理規定があるが、果たしてそれは実際に当てはまるものなのか、通訳者のジレンマとなるシナリオを用いて通訳者にインタビューをし、その回答をナラティブに示して考察し、現状に合う倫理綱領と教育の整備を主張している。手話通訳者についての論文であるが、倫理的ジレンマの例と問題点は、大変興味深い。(渡部)

Wadensjö, C. (1998). *Interpreting as Interaction*, London and New York: Longman.

先に論文を紹介した Wadensjö の理論を包括的にまとめた代表的著作である。2 者間の通訳を考察しており、会議通訳者にとっても大変参考になる。研究者や教育者だけでなく、実務家、学生もぜひ、目を通すべき1冊であると考ええる。(渡部)

Berk-Seligson, S. (1998). The Impact of Politeness in Witness Testimony: The Influence of the Court Interpreter., *Multilingua* 7(4). pp.411-39. (reprinted in F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.). *The Interpreting Studies Reader*. (pp. 279-92). London and New York: Routledge.)

法廷通訳者が使うポライトネスが与える影響を、実験をもとに分析して考察している。ここではポライトネスの中で、sir と ma’am の使用の有無のみが調べられている。(渡部)

永田小絵 (1998) 「話し手はなぜ通訳者に話すのかー逐次通訳の場合ー」『通訳理論研究』第8号

本学会の前身の研究会のジャーナルの掲載論文で面白い内容である。「話し手はなぜ通訳者に話すのか」は通訳の現場で感じることである。筆者は話し手の心理に関わることと仮定して、心理学の専門家との対話を通じて整理し記述している。(渡部)

通訳の実践・教育・研究に有用と思われる対人コミュニケーション論の文献

Festinger, L. (1950). *Informal Social Communication. Psychological Review*. 57 (5). pp. 271-282.

コミュニケーションには道具的 (instrumental) なものと自己充足的 (consummatory) なものの2種類があり、対人コミュニケーションのほとんどが道具的なものであるという Festinger の有名な説明が記されている論文である。(渡部)

Watzlawick, P., Bavelas, J. B., & Jackson, D. D. (1967). *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. New York: W. W. Norton & Company.

邦訳 (山本和郎監訳) (1998) 『人間コミュニケーションの語用論 相互作用パターン、病理とパラドックスの研究』二瓶社

家族間のコミュニケーションから、自己開示の応酬により、ワンアップポジションとワンダウンポジションの役割交代と、それが崩れたシンメトリーエスカレーションあるいは、役割の固定といった状況が生ずることを説明した。通訳場面の相互作用の展開を予測するのに重要なヒントを与えてくれる。(渡部)

Mehrabian, A. (1972). *Nonverbal Communication*. New Brunswick and London: Aldine Transaction.

情報の55%は表情で、38%が周辺言語、言葉は7%に過ぎないという Mehrabian の有名な説が記されている。これについて批判はあるが、通訳では言語理解に重点を置くために、非言語の機能についてはまとまったものを1冊は読んで把握しておく必要がある。(渡部)

Goffman, E. (1982). *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Pantheon.

邦訳 (浅野敏夫訳) (2012) 『儀礼としての相互行為：対面行動の社会学』法政大学出版局
1967年に出版されたゴッフマンの主要著書。社会における人間の行動を儀礼から分析したもの。フェイスの概念を示した。(渡部)

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

邦訳 (田中典子監訳) (2011) 『ポライトネス言語使用における、ある普遍現象』研究社
ポライトネスはどの言語にも普遍的な言語戦略であることを詳述した、ポライトネスの基本書。ポライトネスは対人配慮のためだけでなく、使用者の意図と相手への影響を考慮する必要がある、通訳実践と教育にとって重要な書である。(渡部)

Hall, T. H. (1990). *The Hidden Dimension*. New York: Anchor.

邦訳（日高敏隆・佐藤信行訳）（2000）『かくれた次元』みすず書房

対人コミュニケーションの重要な非言語要素に空間／距離がある。ホールはそれを proxemics（プロセミクス：近接学）としてアメリカ人の対人距離を説明した。通訳者は空間／距離の影響を理解しておく必要があり、その意味で有用な参考資料である。（渡部）

May, J. L. (1993). *Pragmatics: An Introduction*. New Jersey: Wiley-Blackwell

邦訳（澤田治美・高司正夫訳）（1996）『ことばは世界とどうかかわるか 語用論入門』（言語学翻訳叢書第2巻）ひつじ書房）

語用論を分かりやすく説明している。購入は難しいかもしれないが、大学の図書館には入っている。（渡部）

Ting-Toomy, S. (Ed.). (1994). *The Challenge of Face Work, Cross-Cultural and Interpersonal Issues*. New York: State University of New York Press.

フェイスに関する代表書。フェイスの基礎および概要から出発し、異文化およびジェンダー、対人関係の問題点について、10人の研究者による論文をまとめ編集したものである。通訳の実践及び教育に必要な知識である。（渡部）

Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Addison Wesley Longman Limited.

邦訳（浅羽亮一監修）（1998）『語用論入門 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社出版

全く知らない人にも理解できるように書かれた語用論の本である。例がいろいろなところから採り上げられているので、初学者は興味を持って読めるだろう。（渡部）

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

ポライトネスについて要点をやさしくまとめたもので、初学者用である。（渡部）

Griffin, E. (2009). *A First Look at Communication Theory*. (Seventh Edition). New York: McGraw-Hill.

初学者のために、各コミュニケーション理論を数ページにまとめた概要書である。Mead、Blumer、Watzlawick、Festinger などによる主要な対人コミュニケーション理論家も含まれる。理論を概観して通訳に必要な視点を考察するのに有用な書である。（渡部）

Gamble, T. K. and Gamble, M. (2010). *Communication Works*. (Tenth Edition). New York: McGraw-Hill.

10版を重ねる大学の学部レベルのコミュニケーションの人気テキストである。優しい切り口で分かりやすく書いてあるが、レベルは高く内容は濃い。コミュニケーションをもう一度しっかり学びたいと考えている通訳の実践家や教育者にはお奨めである。（渡部）

Hargie, O. & Dickson, D. (2010). *Skilled Interpersonal Communication Research, Theory and Practice. (Fifth Edition). London and New York: Routledge.*

対人コミュニケーションを非言語、質問、投げ返し、傾聴、説明、自己開示、アサーション、交渉などのスキルに分け、先行文献のレビューののち各スキルを詳述している。1冊で、対人コミュニケーションの各スキルを深く包括的に学習できる。(渡部)

渡部富栄 (2011)『対人コミュニケーション入門 看護のパワーアップにつながる理論と技術』ライフサポート社

看護職を対象にした本であるが、200 頁足らずで対人コミュニケーションスキルを網羅しつつ分かりやすく説明しており、通訳の学習者や実務家が対人コミュニケーションを基礎から効果的に理解するのに有用である。第3章の治療的コミュニケーションは、医療通訳の基礎学習に有益である。(渡部)

(h) 言語処理・脳科学の視点 (篠塚勝正)

【概観】脳内言語処理及び、言語変換を伴う通訳時の脳科学的な知識を得るためには、先ず、脳の活動局在部位の働きを知る必要がある。そのために、脳疾患患者から得た知見により脳の局在部位の働きを、先ずは日本語の文献で概略を知った後に(例えば、前頭葉は、どのような働きをするかなど)、脳内言語処理を把握することが大切であると言える。現在、バイリンガルにおける脳の活動部位は、脳機能イメージング機器でかなり分かってきたが、そのほとんどが、欧米語間のものであり、日英の研究結果はまだ非常に少ない。そういった中、J. Martensson et al. (2012)では、L1 がインド・ヨーロッパ語派に属するスウェーデン語の母語話者が、言語距離*の離れている L2 のアラビア語などのへの集中的な通訳訓練により、海馬の容量(短期記憶庫)が増えるということが判明した。今後は、日英のように言語距離の離れている通訳及び、通訳訓練が大脑皮質を中心とし、運動機能を司る小脳やその他の特定活動部位、ニューロン(脳細胞)の可塑性に焦点を当てた多くの実験結果が期待される。(篠塚)

*註: 言語距離 (Linguistic Distance :LD) に関しては、Chiswick, B. R. and Miller, P. W. (2005) を参照。

日本語文献

松下正明総編集 (2003)『新世紀の精神科治療 6 認知の科学と臨床』中山書店

精神疾患に関係する医学書であるが、4 章の認知の神経科学の項での「認知の神経生理学的基盤」では、視覚入力、聴覚入力に対する、脳機能イメージング機器 (fMRI.MEG) における脳画像の賦活、反応が掲載されており、脳科学の全体像を把握しやすい。また、5 章の「認知の神経心理学的基盤」では、脳損傷の症例から、短期記憶、ワーキングメ

メモリ、長期記憶などを説明している。7章の「神経疾患と認知機能」では、脳機能画像からみた認知機能において、図1で、Brodmannによるニューロン（脳神経細胞）の細胞構築学に基づいた、脳地図が掲載され、BA44.BA45などの局在地の把握が分りやすい。（篠塚）

大北葉子（2008）「脳科学と言語研究」御茶ノ水女子大 日本言語研究会『第二言語習得・教育の研究最前線—2008年度版』2008年11月増刊特集号, pp. 142-65.

認知科学、脳科学の知見から言語処理及び、言語脳地図の説明が初心者でも非常にわかりやすく述べてある。また、NIRS・EEG・MEG・MRI（脳機能イメージング機器）の測定目的の違いやそれぞれの特徴にも言及しており、言語脳科学に興味のある人にとって脳内言語処理の理解がしやすい。特に9章(160~164頁)は、Q&A sessionで構成され、脳科学が専門でない研究者からの質問に筆者が懇切丁寧に答えており、言語脳科学の基礎的な知識を知るために有益な情報が掲載されている。（篠塚）

青山尚樹・佐々木淳、酒谷薫編著（2009）『脳のしくみ』日本実業出版社

脳の構造から、神経細胞（ニューロン）、記憶、言語、脳疾患に関して、脳外科医らが初心者用に説明をしている入門書。8章では、MRIとNIRSの説明も加えられており、脳機能イメージング機器の役割が理解できる。（篠塚）

S. E.ギャザーコール・T. P. エロウェイ著、湯澤正通・湯澤美紀訳（2009）『教師のための実践ガイド：ワーキングメモリと学習指導』北大路書房

この書籍は、脳内言語処理や通訳、通訳訓練に関して言及は全くないが、多重処理を行う通訳作業には、ワーキングメモリの賦活は不可欠であり、ワーキングメモリの認知的な概略の知識を知ることが大切であると言える。特に、ワーキングメモリとは？といった極一般的説明から、言語（母語）や算数との言語性ワーキングメモリとの関係といったことも説明され、通訳教育のみならず、教育一般の知識として、教員が知っているべき情報を扱っている。日本語に翻訳されているので、初心者にもワーキングメモリの知識を理解しやすい。（篠塚）

入来篤史編者、甘利俊一監修（2010）『シリーズ脳科学③：言語と思考を生む脳』東京大学出版

言語処理の脳機能局在、外国語習得の臨界期、早期バイリンガルと晩期バイリンガルとの比較などを脳科学的知見から言及している。特に、第3章、3.4.2には、バイリンガルの脳活動と臨界期に関して言及しており、興味深い。（篠塚）

村上郁也編（2010）『認知神経科学—心理学と脳科学が解くこころの仕組み』オーム社

この本の特徴は、至る所にイラストや実験データが挿入されており、とても理解しやすい。特に、第6章の「言語」では、音声認識、文字認識、メンタル・レキシコンからの

アクセス、文章理解などといった説明を、脳のニューラルネットワークの立場から説明されており、読者の興味をそそるであろう。(篠塚)

田中啓治編者、甘利俊一監修 (2010) 『シリーズ脳科学②：認識と行動の脳科学』 東京大学出版

ニューラルネットワークにおけるニューロン（脳細胞）とシナプスの関係といった言語処理や学習に不可欠な説明や、シナプスの可塑性、長期記憶（エピソード記憶、意味記憶）、ワーキングメモリ、海馬での記憶増強などに言及しており、脳科学的な記憶研究に興味がある人には必読書である。(篠塚)

英語文献

Rinne, J.O. et al. (2000). The Translating Brain: Cerebral Activation Patterns during Simultaneous Interpreting. *Neuroscience letters*. 294. pp. 85-88.

被験者は、L1 がフィンランド語、L2 が英語のプロの同時通訳者の同時通訳及びシャドーイングを行っている時の脳賦活の PET で実験。刺激材料は、会議通訳レベルのものを使用した。まず、L2-L1 の同時通訳では、BA6.46 の高い賦活がみられた。L1-L2 の同時通訳では、BA45.BA20/28.BA6 の高い賦活が計測された。一方、L1 及び L2 のシャドーイングでは、temporal & posterior frontal area 及び、小脳の賦活がみられた。小脳は、運動活動を自動化させる脳であり(例えば、スポーツ、車の運転など)、シャドーイング訓練は運動活動の自動化に関連するか否か今後の科学的な知見が待たれる。(篠塚)

Chiswick, B. R. & Miller, P. W. (2005). Linguistic Distance: A Quantitative Measure of the Distance Between English and Other Languages. *Journal of Multilingual and Multicultural, Taylor and Francis*.

英語を L1 とするアメリカ人が、世界の代表的な言語（ここでは 43 言語）を習得するための時間、また L2 の文法、文字表記などとの差異を考慮に入れて、言語間距離(LD)を数値化(3.00 が一番習得しやすく、1.00 が一番習得しづらい)している興味深い論文である。因みに、英語母語話者の LD のスコアが一番高い言語は、3.00 の Afrikaans, Norwegian and Swedish で、逆に Japanese and Korean は、1.00 で LD が一番離れている。これは、通訳、英語習得に関しても、その習得に費やす時間が掛かるのをスコアで説明できる参考文献として引用が可能な論文となるであろう。因みに、google scholarなどで、「Linguistic Distance: A Quantitative Measure of the Distance Between English and Other Languages」と論文のタイトルを入力すれば pdf file で入手できる。(篠塚)

Heuven, W. J. B., Schriefers, H., Dijkstra, T. & Hagoort P. (2008). Language Conflict in the Bilingual Brain. *Cerebral Cortex*. 18. pp. 2706-16.

オランダ語を L1 とする L2 が英語の早期バイリンガル 24 人を fMRI によって実験を行った。刺激語は、オランダ語、英語、オランダ語と英語の同形異義語 (homographs) とし

た。その結果、同形異義語刺激に対し、バイリンガルであっても、L1 の干渉は避けられず、LIPC (BA 45, 46, 47)以外に、pre-SMA (前補足運動野)、ACC (前帯状皮質)、basal ganglia (基底核)の賦活がみられた。この理由は、オランダ語、英語の同語派における、発音上、意味上の判断の難しさが関係すると考えられる。この結果から、日英のように全く語源、語派の異なる言語変換や通訳に関しても更に言及できるといえよう。(篠塚)

Kavelman, I., Baker, S.A. & Petitto, L. (2008). Bilingual and Monolingual Brains Compared: A Functional Magnetic Resonance Imaging Investigation of Syntactic Processing and a Possible “Neural Signature” of Bilingualism. *Journal of Cognitive Neuroscience*. 20(1). pp. 153-69.

L1 スペイン語 L2 英語の早期バイリンガル7人と L1 英語のモノリンガル 10 人を被験者とし fMRI を用いた実験。刺激文は、スペイン語、英語ともに同じ難易度レベルの文を視覚入力とし、脳の賦活場所が異なるかを調べた。結果は、共通して賦活した部位は、LIFC(left inferior frontal cortex: 左下前頭回皮質 :BA44)であるが、バイリンガルは、BA45 (三角部) の賦活が認められた。この部位は、L2 習得時期の遅いバイリンガルの賦活が認められていたが、統語上に違いのある英語、スペイン語には、早期バイリンガルであっても負荷が高いと言える。一方、モノリンガルの英語 L1 者では、BA45 の賦活は低いことが判明した。つまり、BA45 がバイリンガルに関係する局在地であることを示唆している。(篠塚)

Kovelman et al. (2008). Shining New Light on the Brains “Bilingual Signature”: A Functional near Infrared Spectroscopy Investigation of Semantic Processing. *Neuroimage* .39(3). pp. 1457-71.

バイリンガルとモノリンガルの言語変換時と変換していない時を fNIRS で比較した実験結果である。被験者は①L1 がスペイン語、L2 が英語の早期バイリンガル 10 名で、②L1 が英語のモノリンガル 10 名である。刺激は、視覚入力で、スペイン語或いは絵(例えば、手の絵など)である。英語モノリンガルには、英語のみの刺激だけである。実験結果は、PFC(BA44/45)の賦活は、バイリンガルもモノリンガルには差異がなかった。しかし、右脳左脳の Working-Memory/ AttentionPFC(BA46/9)及び、IFC(BA47/11)において、言語変換をしていない時でも、モノリンガルと比較してバイリンガルの賦活が高かった。また、言語変換時 (バイリンガルのみの実験) では、右脳の DLPFC&IFC が強く賦活した。今回の結果から、バイリンガルでは、L1 処理の差異、モノリンガルとは異なる脳部位の賦活がみられたことが興味深い。(篠塚)

Majerus, S. et al. (2008). Neural Networks for Short-Term Memory for Order Differentiate High and Low Proficiency Bilinguals. *Neuroimage*. 42. pp. 1698-1713.

2 言語の運用能力の高低で、短期記憶情報の保持(STM task)に差異があるかを fMRI で調べた論文。被験者は、L1 がドイツ語で L2 がスペイン語の知識があるバイリンガル。被

験者は 1. high と 2. low proficiency bilingual に語彙力知識によって 2 つのグループに分けられた。刺激語は、全てドイツ語の単語の視覚入力で、①表示された単語の順番を覚えるタスク②表示された単語自体を覚える。結果は、被験者 1 の①のタスクの結果、lateral orbito-frontal & superior frontal gyri , left IPS, right IPS&right superior cerebellum の賦活が高く、一方、被験者 2 では、②のタスクの結果、left IPS, bilateral superior temporal and temporo-parietal area の賦活が高いことが判明した。この論文から示唆できることは、low proficiency bilingual は、high proficiency bilingual と異なる部分が賦活をしており、その結果、短期記憶保持量が少なく、言語学習能力が効果的に作用していないのではないだろうかと示唆している。なお、実験の賦活の部分が、それぞれのタスクと学習者レベルによっての負荷部位の差異が多いので、代表的な部分の差異だけを記載した。詳細は、本論文を参照のこと。(篠塚)

Chauncey et al. (2009). Code-Switching Effects in Bilingual Word Recognition. *Brain Language*. 105 (3). pp. 161-74.

32-channel EEG(脳波計：脳神経細胞レベルの活動を測定する)を使用して、L1 フランス語 20 名が、L2 英語単語に code-switching している際の脳反応を ERP(Event-Related Potentials :事象関連電位)計測した。実験 1 では、視覚入力を 50ms、実験 2 では、100ms とした。刺激語は、L1.L2 共に、4-6 文字である。L1.L2 の混乱を避けるために同族語は使用していない。実験結果では、L1-L2switch の時、N250 成分が、L2-L1 の時、N400 成分が顕著に出現した。この結果は、L1 認識が早いゆえに、N250 成分が早く出現したと考えられる。(篠塚)

Kaushanskaya et al. (2011). The Relationship between Vocabulary and Short-Term Memory Measures in Monolingual and Bilingual Speakers. *International Journal of Bilingualism*. 15(4). pp. 408-25.

認知言語学見地からのバイリンガル(L1English・L2 Spanish)とモノリンガルの語彙量及び、短期記憶課題の差異における行動実験。 先ず、バイリンガルを 1. Simultaneous (早期：平均接触開始年齢は 1.7 歳)と 2. Sequential (晩期：同じく 7.5 歳)バイリンガルに分けている。

なお、被験者の言語背景、熟達度などは Language Experience and Proficiency Questionnaire(Marian, Blumenfeld, and Kaushanskaya, 2007)を参照のこと。

実験 1 では、被験者は 24 名の Simultaneous English-Spanish バイリンガルと 30 名の英語モノリンガルの計 54 名であった。実験 2 では、実験 1 とは全員異なる被験者で、30 名の Sequential English-Spanish バイリンガルと 30 名の英語モノリンガルの計 60 名であった。

実験 1 のタスクでは、両被験者に 1. L1 の英語の受容語彙量の計測 2. Phonological short-term memory test を行ったが、どちらの被験者に統計上に有意差はなかった。実験 2 では、両被験者に、1. L1 の 受容語彙と発表語彙量の計測、2. Phonological short-term

memory test を行った。その結果、実験 1 同様、受容、発表語彙量に差異はなかった。また、Phonological short-term memory test にも差異はなかった。しかし、実験 1 と 2 とともに、Phonological short-term memory test において bilingual group に、digit-span 保持が長い者がいた。この結果は、bilingual speaker は、monolingual speaker と比較すると L1 の語彙検索に、音韻性短期記憶資源に依存するのではなからうかと示唆している。この実験結果が、通訳者にも同じことが言えるかどうか、通訳者を被験者とした更なる研究結果が必要である。(篠塚)

Marian, V. & Shook, A. (2012). The Cognitive Benefits of Being Bilingual. *Cerebrum*. 2012 Sep-Oct Vol.

この論文では、まず EU 諸国では、平均 56%がバイリンガルであり、バイリンガルである利益を述べている。1. 欧州内では言語が似ている(例えば、綴り、発音)にも拘わらず、バイリンガルは、スピーキングにおいて、L1 からの影響をコントロールできる。2. 古典的な実験で Stroop Task において、バイリンガルは、モノリンガルと比較して、Stroop Task の結果がよく、バイリンガルは入力された 2 つの課題を行う認知的な抑制コントロールがうまく遂行可能である。3. fMRI で、スペイン語と英語のバイリンガルを被験者とし、絵を見せ code-switch させた時に、DLPFC(注意、抑制を司る大脳皮質の部分)と、ACC、左右 Supramarginal gyri (縁上回)、left-IFG の賦活がモノリンガルと比較し高いと述べている。因みに、left-IFG は、言語産出の中心であり、認知抑制を司る部分である。また、バイリンガルは、意味のない例えば、da という音に対して、subcortical area(大脳皮質下層にある部分で、随意運動を調整する)の賦活が高い。4. バイリンガルは、新しく覚えた語彙のリスニングの知覚、認知にモノリンガルより長けている。5. バイリンガルは、アルツハイマーといった認知的な疾病の罹患の年齢を遅らせる。以上、バイリンガルに対する有益な面を取り上げている。(篠塚)

Martensson, J. et al. (2012). Growth of Language-Related Brain Areas after Foreign Language Learning. *Neuroimage*. 63. pp. 240-244.

集中的な通訳訓練を受けた者は、大脳の脳細胞(ニューロン)の灰白質の thickness(厚み)が増し、特に左脳の海馬(記憶・学習に関係する：アルツハイマーでは海馬委縮が認められる)の容積も増したことを脳科学的に発見した論文。被験者 1 は、Swedish Armed Forces (国軍)の通訳コースの受講生 14 名(平均年齢 19.9 歳)で、L1 はスウェーデン語、L2 は Dari 語(ペルシャ語に類似)、ロシア語、アラビア語で、被験者全てが、L2 には、通訳コース受講前には、触れていない。このコースは、10 か月で、新しい言語をマスターし、L2 との通訳ができるレベルまでにするもので、授業内容と自学習は、10 か月ほとんど休みなしというとてもハードなコース。被験者 2 は、L1 がスウェーデン語で、L1 (つまり母語で)で医学、認知心理学を学ぶ大学生 17 名(平均年齢 20.6 歳)。10 か月の集中訓練で、授業開始から 3 か月後の脳の状態を fMRI で、pre&post を行った。その結果、被験者 1 と 2 との比較で、通訳訓練者では、右海馬の容量が増え、左大脳皮質の STG, IFG, MFG 部

分の厚みが増したことが分かった。なお、被験者 2 では、通訳訓練者のような脳の変化はなかった。この結果から、臨界期を過ぎた者であっても、極めて集中的な外国語習得訓練を行えば、脳の可塑性により外国語習得は十分可能であり、通訳訓練の効果を脳科学的に証明している論文と言えよう。因みに、海馬容量の増加は、ロンドンのタクシードライバーに顕著に表れている先行研究が沢山ある(例えば、A.Eleanor et al, 1997 など)。(篠塚)

Grosjean, F. & Li, P. (2013). *The Psycholinguistics of Bilingualism*. Wiley-Blackwell.

既存のバイリンガリズムの著書とは異なり、先ず情報が最新であること。また、心理言語学のみならず、認知言語学にも触れ、バイリンガルの speaking, reading, writing and listening といった 4 技能の関しても、モノリンガルとバイリンガルの比較を詳細に言及している。最後の 10 章では、脳科学的知見を含めているので、バイリンガルを総括的に知るための必読書と言える。言語変換する通訳には、バイリンガリズムと重なる部分もあるので、通訳研究にも有益な著書と言える。(篠塚)

(i) 通訳基礎トレーニング (田中深雪)

【概観】通訳基礎トレーニングは、これから通訳を本格的に学びいざ通訳入門者、初心者などを主な対象としている。ここで注意が必要なのは、従来から欧米各国においては通訳スキルの指導は、少なくともバイリンガルレベルの語学力がある者を対象として実施するのが通例であるため、通訳の基礎的なトレーニングは、語学教育のカテゴリーとして括るべきであるとの認識が一般的である点であろう。しかし、日本などのアジア諸国や中近東など、必ずしもバイリンガルでない学習者が通訳者としての訓練を受けているような国々においては、通訳基礎トレーニングは欠かすことができない一つの分野となっており、もはやその存在を無視することは出来ない。なお、この項目は上記 (b)の“通訳スキルの養成”と内容的に重なる部分が多いため、(b)の文献も合わせて利用して頂きたい。

Kalina, S. (2000). Interpreting Competences as a Bases and a Goal for Teaching. *The Interpreters' Newsletter*. 10. pp. 3-32.

通訳者にとって必要なスキルとはいったい何なのかという点を考察した論文である。通訳の基礎的なトレーニングについて、従来からの通訳者育成手法に対して疑問を投げかけている点が興味深い。(田中)

Santulli, F. (2002). The Role of Linguistics in the Interpreter's Curriculum. In G. Garzone & M. Viezzi (Eds.), *Interpreting in the 21st Century*. (pp. 257-266). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

本書は2000年に開催された“First Forlì Conference on Interpreting Studies”での様々な発表

内容をまとめたものである。通訳トレーニングに関する論文は5本ほど収録されているが、特にこの論文は通訳訓練カリキュラムにおける言語学の役割を述べたもので、言語学的知識の重要性を説いている点が特徴であろう。（田中）

Sawyer, B.D. (2004). *Fundamental Aspects of Interpreter Education*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

本書は通訳教育におけるカリキュラムやアセスメントについて詳細に述べてあり、概要を概観できるため、これまでも多く引用されている。またケース・スタディにおける各種データや、評価についての具体的な事例なども豊富で、通訳教育のプログラムを考える上で参考になる。（田中）

Niska, H. (2005). *Training Interpreter Programmes, Curricula, Practices*. In M. Tennent (Ed.), *Training for the New Millennium Pedagogies for Translation and Interpreting*. (pp. 35-64). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

本書はスペインで開催された国際フォーラムでの各種発表が基になっている。主に、現在（本書が発表された時点）の翻訳・通訳プログラムについての現状と、これからの展望が述べられている。この論文は、世界各国の通訳者養成のためのプログラム、カリキュラム、実践など具体的に記してあるため利用しやすい。（田中）

Mendelsohn, J. D. (2006). *Learning How to Listen Using Learning Strategies*. In Martinez-Flor & E. Uso-Juan (Eds.), *Current Trends in the Development and Teaching of the Four Language Skills*. (pp. 75-89). Berlin: Mouton de Gruyter.

通訳基礎トレーニングにおいて欠かすことのできないリスニング能力の育成に関して書かれた論文である。具体的にどのように指導すれば良いのか、学習ストラテジーが述べられているため、教員が実際に指導に応用するのに便利。（田中）

Zannirato, A. (2007). *What Can Language teachers Learn from Interpreter Trainers?* In B. F. Darquennes & J. R. Temmerman (Eds.), *Multilingualism and Applied Comparative Linguistics Pedagogical Perspectives*. (pp. 69-87). Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.

上記同様、通訳訓練と語学教育について書かれた論文。急速に進むグローバル化の流れの中で、通訳訓練も以前のようにバイリンガルを前提とすることができない時代になっているにも拘らず、通訳訓練における語学強化の必要性が論じられることが少ない点が指摘されている。（田中）

田中深雪・稲生衣代・河原清志・新崎隆子・中村幸子（2007）「通訳クラス受講生たちの意識調査－2007 年度実施・通訳教育分科会アンケートより」『通訳研究』第7号, pp. 253-63.

日本通訳翻訳学会の旧通訳教育分科会のプロジェクトとして実施したアンケート調査の

結果報告、および分析である。通訳教育に関して全国的な規模で実施した唯一の調査であるため、現在でも参考文献として利用されているようである。（田中）

Zannirato, A. (2008). Teaching Interpreting and Interpreting Teaching: A Conference Interpreter's Overview of Second Language Acquisition. In J. Kearns (Ed.). *Continuum Studies in Translation, Translator and Interpreter Training, Issues, Methods and Debates*. (pp. 19-38). London: Continuum International Publishing Group.

通訳訓練とSLA（第二言語習得論）について詳細に書かれた数少ない論文の一つ。通訳外国語教授法と通訳トレーニングは互いに密接に関連している点が述べられており、通訳基礎トレーニングについて考えたい場合、是非とも一読して欲しい。（田中）

Gile, D. (2009). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. (Revised Edition.). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

⇒(c) 通訳者の養成 を参照。

Cutler, A. (2012). *Native Listening—Language Experience and the Recognition of Spoken Words*. Cambridge, Massachusetts.: The MIT Press.

通訳基礎トレーニングでは、リスニング力の増強が必須である。近年のリスニング研究の進展は目覚ましいものがあるが、本著は中でも、母語におけるリスニングと外国語におけるリスニングとの違いについて論じてあり、リスニング指導の際の参考になる。（田中）

その他、基礎トレーニングで、以下の文献もある。（河原）

- 篠田顕子・新崎隆子（1990）『今日からあなたの英語は変わる!—プロからぬすむ同時通訳のテクニック』日本放送出版協会
- 篠田顕子・石黒弓美子・水野的・新崎隆子（2000）『英語リスニング・クリニック』研究社
- 国井信一・橋本敬子（2001）『究極の英語学習法 K/H System 入門編』アルク
- 鳥飼玖美子（2001）『「プロ英語」入門—通訳者が実践している英語練習法』講談社
- 国井信一・橋本敬子（2002）『究極の英語学習法 K/H System 入門編 ワークブック』アルク
- 篠田顕子・石黒弓美子・水野的・新崎隆子（2002）『英語リスニング・クリニック—Diagnoses and remedies（初診者コース）』研究社
- 鳥飼玖美子監修（2003）『はじめてのシャドーイング』学習研究社
- 門田修平・玉井健（2004）『決定版 英語シャドーイング』コスモピア
- 長沼君主・河原清志（2004）『Listening & Reading デュアル英語トレーニング』コスモピア
- 新崎隆子・高橋 百合子（2004）『眠った英語を呼び覚ます—DLS 英語学習法のすすめ』

はまの出版

- 田中深雪 (2004) 『英語リスニングの「基礎トレ」—プロに教わる秘密のメニュー』講談社インターナショナル
- 稲生衣代・河原清志 (2005) 『VOA スペシャル やさしいニュース英語トレーナー』コスモピア
- 稲生衣代・河原清志 (2005) 『VOA スタンダード ニュース英語トレーナー』コスモピア
- 国井信一・橋本敬子 (2006) 『究極の英語学習法 K/H System 発展編 ロジカル・リスニング』アルク
- 門田修平・高田哲朗・溝畑保之 (2007) 『シャドーイングと音読英語トレーニング』コスモピア
- 新崎隆子・石黒弓美子 (2011) 『最強の英語リスニング・実戦ドリル』研究社
- 小松達也 (2012) 『英語で話すヒント—通訳者が教える上達法』岩波新書
- 新崎隆子・石黒弓美子 (2013) 『英語スピーキング・クリニック——通訳訓練法で鍛える知的英語力』研究社

(j) 通訳教育評価論 (高橋絹子)

【概観】通訳の評価を行う際の方法を紹介する。実際に教育現場で用いられている方法に関するものというよりも、さまざまな研究目的に応じて採用された評価法を紹介するが、教育現場にも応用が可能と思われる。Pöschhacker (2004) によれば通訳の評価方法に関しては、評価者がそれぞれの評価法を用いるため、評価者の数と同じくらいの種類があるといわれている。研究の対象となっているほとんどが同時通訳である点は興味深い。外国語教育では、テスト分野で習熟度やその評価の方法の研究が盛んに行われていることから、その基礎となる文献も合わせて紹介する。今後、通訳教育への応用が期待できる分野である。(高橋) *本項目のみ、説明の便宜上、年代順ではない配列にしている。

Bartłomiejczyk, M. (2010). Effects of Short Intensive Practice on Interpreter Trainees' Performance. in D. Gile, G. Hansen and N. K. Pokorn (eds.) *Why Translation Studies Matters*. (pp. 183-94). Amsterdam: John Benjamins.

最初に紹介するのは、Bartłomiejczyk の論文である。一見、評価とは関係ないようなタイトルであるが、この中で Bartłomiejczyk は、訳出の研究の手法には大きく分けて 1) propositional accuracy scores と 2) error analysis のふたつの手法があるとしている。それぞれの代表的な研究の例をあげて評価方法とともに研究を説明したものである。(高橋)

Bovair, S. and Kieras, D. E. (1981). A Guide to Propositional Analysis for Research on Technical Prose. in B. K. Britton and J. B. Black (eds.) *Understanding Expository Text: A*

Theoretical and Practical Handbook for Analyzing Explanatory Text. (pp. 315-64). Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

Bartłomiejczyk の分類の1) propositional accuracy scores に分類される手法を詳しく述べたものである。ソーステキストをpropositionで区切り、その単位で訳出を調べるやり方である。これは命題分析に基づくやり方で、もともとは Kintsch (1974) により開発された手法である。(高橋)

Dillinger, M. (1994). Comprehension during Interpreting: What Do Interpreters Know that Bilinguals Don't? in S. Lambert and B. Moser-Mercer (eds.) *Bridging the Gap: Empirical Research in Simultaneous Interpretation*. (pp.155-189). Amsterdam: John Benjamins.

前述のBartłomiejczyk による分類の1) propositional accuracy scores に分類される手法を用いた英仏の同時通訳に関する研究である。ソーステキストをsemantic role (thematic role) により区切り、それぞれ区切られたセグメントの訳出をプロの通訳者と通訳訓練を受けていない英語とフランス語のバイリンガルの学生の間で比較している。さらにsyntactic processingの違いとしてテキストのclause densityとclause embeddingという項目で調査、またproposition generationの違いとしては、テキストのproposition densityとdirectness of mappingで調査を行っている。結論として、プロの通訳者の方が、テキストベースで有意に17%訳出の正解率が高かったとしている。(高橋)

Barik, H. C. (1975). Simultaneous Interpretation: Qualitative and Linguistic Data. in F. Pöchhacker and M. Shlesinger (eds.) *The Interpreting Studies Reader*. (pp.121-37). London and New York: Routledge.

ここではBartłomiejczyk の分類の 2) error analysis に分類される手法を用いた研究を紹介している。訳出をomission (訳もれ), substitution (誤訳), addition (付け足し) に分類する評価方法を用い、訓練生の仏英の同時通訳における訳出の問題を調査している。ここでは結果として訓練生はプロの通訳者よりもomission (訳もれ)が多いと結論づけている。(高橋)

Altman, J. (1994). Error Analysis in the Teaching of Simultaneous Interpreting: A Pilot Study. in S. Lambert and B. Moser-Mercer (eds.) *Bridging the Gap: Empirical Research in Simultaneous Interpretation*. (pp. 25-48). Amsterdam: John Benjamins.

前述のBarik同様、Bartłomiejczyk の分類の 2) error analysis に分類される手法を用いた研究を紹介している。エラーの項目を、a) omissions, b) additions, c) inaccurate renditions of individual text items, d) distortions of longer phrases の 4 項目で評価し、エラーの種類に序列を設け、訓練生の仏英の同時通訳の問題を調査している。(高橋)

Kurz, I. and Färber, B. (2003). Anticipation in German-English Simultaneous Interpreting. *Forum*, 1(2), pp. 123-50.

上記のふたつの手法を組み合わせた手法で、独英の同時通訳における動詞の予測の調査

を行い、さらに動詞の予測の成功率と訳出の関係を、a) communicative inaccuracies と b) flaws in delivery というふたつの項目との関係で評価している。(高橋)

Gile, D. (1995). Fidelity Assessment in Consecutive Interpretation: An Experiment. *Target*, 7(1), pp. 151-54.

仏英の逐次通訳を参加者に 5 段階 (poor, mediocre, average, good, very good) で評価してもらった実験を扱っている。5 段階の評価方法についての紹介はもちろん、実験結果を通して「訳の忠実性」はどういうものかを考察している。通訳の評価とは何かを考えるあたり、参考になる。(高橋)

Kurz, I. (2002). Conference Interpretation Expectations of Different User Groups. in F. Pöchhacker and M. Shlesinger (eds.) *The Interpreting Studies Reader*. (pp. 312-24). London and New York: Routledge Language Readers.

プロ通訳者の同時通訳を会議で聞いた出席者 (ユーザー) に、発音、声、流暢さなど 8 項目からなる通訳の評価に関するアンケート調査を実施。出席者を 4 つのユーザーグループに分け、それぞれ比較検討を行っている。通訳者の異文化間コミュニケーションの役割の重要性を再認識する結果となっている。(高橋)

Lotriet, A. (2002). Can Short Interpreter Training Be Effective? The South African Truth and Reconciliation Commission Experience. in E. Hung (ed.) *Teaching Translation and Interpreting 4*. (pp.83-98). Amsterdam: John Benjamins.

南アフリカの短期通訳訓練に関する結果を報告しているが、その中で、最後に行われる試験の通訳評価の項目も紹介されている。大きく分けると、a) language skills, b) content, c) technique の 3 項目であるが、それぞれの項目の中にたとえば、language skills では vocabulary や sentence construction また content では deverbilization や accuracy というように、さらに細分化された項目を紹介している。(高橋)

Riccardi, A. (2002). Evaluation in Interpretation: Macrocriteria and Microcriteria. in E. Hung (ed.) *Teaching Translation and Interpreting 4*. (pp. 115-127). Amsterdam: John Benjamins.

Riccardi は通訳評価において、a) macrocriteria と b) microcriteria のふたつの観点から評価することの重要性を説いている。等価性や正確性など 4 つの項目に関して macrocriteria では分析し、音韻を含む多岐に渡る評価項目に関する分析を microcriteria ではを紹介している。(高橋)

Fulcher, G. (2003). *Testing Second Language Speaking*. Harlow, UK: Pearson Education.

著作は、通訳と直接関係はないが、スピーキングの評価の方法としてまず a) holistic scale で段階的な評価により全体的な印象を評価し、そのあとさまざまな観点から評価する b)

analytic scale という評価方法が紹介されている。これは通訳にも応用できる評価方法である。(高橋)

Pöchhacker, F. (2001). Quality Assessment in Conference and Community Interpreting. *Meta: Journal des traducteurs*, 46(2), pp. 410-425.

通訳の質を評価する手法をアンケートやインタビューなどによる調査、実験、コーパスを利用した観察、ケース・スタディの面から、実例で紹介している。一律に「質」を評価することする難しさを示した上で、共通の土台の必要性にも触れている。(高橋)

Pinkerton, Y., and Grainger, T. (2004). Consecutive Interpreting Test—What We Should Evaluate and How We Should Evaluate. *Collected Papers from 'Interpreting Research'*, pp. 227-46.

逐次通訳テストの評価に関する論文である。学生の通訳が Off-site と on-site では、必ずしも一致しないとの観点から、訓練生の逐次通訳を a) linguistic and paralinguistic ability, b) non-verbal factors, c) interpreting technique, d) professionalism の4つの観点から off-site と on-site の両方で評価することを提唱している。オーストラリアの育成機関の評価も紹介している。(高橋)

Schjoldager, A. (1996). Assessment of Simultaneous Interpreting. in C. Dollerup and V. Appel (eds.) *Teaching Translation and Interpreting 3*. (pp. 187-95). Amsterdam: John Benjamins.

著者が実際に通訳訓練に際し、使用しているフィードバックシートや評価の項目を紹介しながら、訓練生に対する評価基準開示の必要性やフィードバックシートの重要性を示している。(高橋)

Shlesinger, M. et al. (1997). Quality in Simultaneous Interpreting. in Y. Gambier, D. Gile and C. Taylor (eds.), *Conference Interpreting: Current Trends in Research*. (pp. 123-32). Amsterdam: John Benjamins.

通訳の「質」の定義の考え方に始まり、ワークショップでの評価関連の手法に関する討議の報告をしている。アンケートはもちろん、スウェーデン政府の用いる MCE という手法、自分の通訳を録音という手法も紹介されている。(高橋)

(k) 通訳教科書、教則本 (中村幸子)

【概観】大学生向けテキスト

大学生向けの実践的通訳テキストの数は、通訳バックグラウンドのある大学教員の数の増加に伴い、増えつつあるが、全体としてはまだまだ多いとはいえない。入門レベルのテキストに付属されている CD の録音はナレーション主体が多数だが、やや上級者向けなどのテキストにはオーセンティックな肉声も入っているので、授業の仕上げに利用するとよい

だろう。学生用のテキストにも CD が附属されているものもあり、自習に適している。また、通訳教本のカテゴリーでは、理論にも大幅な紙面が割かれ、CD も添付されているものが多く、独学用教材としても利用価値が高い。(中村)

北林利治・杉山泰・リチャード・ボナン・西村友美 (1998)『初めて学ぶ翻訳と通訳 言語コミュニケーション入門』松柏社

タイトルが示す通り、通訳だけを扱ったテキストではないが、言語によるコミュニケーションを総合的に考える立場からの内容構成ははじめて通訳を学ぶ大学生にとっても有益である。通訳に関する章では、実践以外に通訳の基礎知識のほか、水野 (1994) の「同時通訳動態モデル」や船山 (1994) の「認知ファイル」を紹介している。なお、練習問題に附属 CD はない。(西村)

齊藤彩子・皆川治恵・リチャード G. ポター (1999)『Developing Interpreting Skills for Communication「通訳とコミュニケーションの総合演習」』南雲堂

基礎的な英語を中心とした短文の通訳練習が多く、即転換の練習に向いている。また各章チャレンジコーナーとして複数文通訳も設けられている。(中村)

水野真木子・鍵村和子 (2005)『Let's Interpret!』大阪教育図書

基本的な通訳テキストを終えた人がより実践的な通訳能力を身に付けるためのテキストとして適している。ジュリアロバーツのインタビューでは本人になり切ってシャドウイングを行ったりボイスオーバーを行うことができ、学生からは好評である。(中村)

齊藤彩子・皆川治恵・リチャード G. ポター・吉田かよ子 (2006)『Applying Interpreting Skills to Communication「コミュニケーションと通訳演習」』南雲堂

中級程度の英語力を身に付けた人が長文の通訳に挑戦するのにふさわしいテキスト。テーマも映画、スポーツ、国際交流、先端技術、企業誘致、FTA など現実的な話題が豊富に取り上げられている。(中村)

鶴田知佳子・横山直美 (2006)『Exercises in English「サイトトランスレーションで意味をとらえよう」』大阪教育図書

なんといっても各ユニットのエッセイが個性的でおもしろい。中級程度の英語力を有するサイトラの教材としてはもちろんのこと、ボイスオーバーにも適している。社会人の通訳クラスにも向いている。(中村)

浅野輝子・中村幸子・ロバート ヒューワー (2008)『Common Situations for Training Modern Interpreters「通訳の現場から学ぶ実践演習」』南雲堂フェニックス

駆け出し通訳の三大業務であるアテンド・レセプション・工場見学の場面をはじめ表敬訪問、医療通訳、法廷通訳、放送通訳、国際会議通訳と一通りの通訳体験をすることが

できる。筆者たちが現場の仕事で積み重ねた経験を基に豊富な実用的表現が盛り込まれている。学生用 CD 付属あり。(中村)

越智美江 (2010)『TOEIC150 点アップを目指す通訳訓練法』大阪教育図書

「大学生活」「留学」「アニメ・漫画」など大学生にとって身近な話題が盛り込まれている。テキスト後半では国際交流の場面の挨拶やスピーチコンテストの司会などのやや改まった場での英日表現を学ぶことができる。(中村)

水野真木子・鍵村和子・中村幸子 (2011)『通訳トレーニングコース』(改訂 4 版) 大阪教育図書

1998 年の初版以来改訂を重ね、2011 年 4 月 1 日改訂四版として内容が一部入れ替えられた。新版には、「草食系男子と肉食系女子」、「海外で活躍する日本人」など今日的な話題も取り上げられている。大学生などの通訳初学者だけでなく一般の語学学習者にとっても英語と日本語の両方を磨き、東西の文化やその心まで学び取れるように構成されている。(中村)

友野百枝・宮元友之・南津佳広 (2012)『通訳学 101～理論から実践まで～』大阪教育図書

このテキストの特徴はスキル訓練のみならず、通訳行為に関する基礎的理論や知識が学べる点である。豊富な文献情報が掲載されており、卒論などで通訳学研究を取り上げる学生にとっては有用である。(中村)

その他、大学生向けテキストで、以下の文献もある。(河原)

- 大畑勝代・奥田光子・Tanimoto, R. A. (2011)『英語通訳入門』〔再改訂新版〕大阪教育図書

通訳教本

柴田バネッサ (1997)『はじめてのウィスパリング同時通訳』南雲堂

通訳訓練教本ではあるが、英検準 2 級程度の学習者が独学で短期間に英語力を上げるためにも活用できる。程良い長さの演習問題が豊富で、ウィスパリング形式の同時通訳演習を重ねることで学習者は飽きることなく次々と課題をこなしていくことができる。CD 付。(中村)

柴田バネッサ (1998)『実践ゼミウィスパリング同時通訳』南雲堂

「はじめてのウィスパリング同時通訳」の続編。こちらはより実践的なトピックを扱っている。学習の目標が明確に定められているため、学習者は実力の伸びを実感しながらトレーニングを継続していける構成になっている。CD 付。(中村)

水野真木子・中林眞佐男・鍵村和子・長尾ひろみ (2002)『グローバル時代の通訳 基礎

知識からトレーニング法まで』三修社

理論編と実践編に分かれている。理論編では言語学との接点（特に語用論）が詳細に論じられている。実践編が扱う素材はやや難度が高い長文となっている。中級者向け教本と言える。CD 付。（中村）

小松達也（2005）『通訳の技術』研究社

通訳の仕事、通訳と言語、通訳の過程などについて詳細な説明がされている。学習者は、通訳とはどういう行為なのか、どのような職業なのかをよく理解したうえで通訳訓練に入ることができる。通訳テキストの多くがスタジオでのナレーション録音を使用しているが、この教本では、オーセンティックな音声教材が用意されている。CD 付。（中村）

日本通訳協会（2007）『英語通訳への道—通訳教本』（改訂版）大修館

英語通訳者になるために必要な通訳業の情報のみならず、通訳の歴史、通訳倫理、通訳訓練のための基礎訓練法、通訳技術の訓練法などを、具体例を交えて解説。通訳訓練は、基礎の訓練方法から始まり、逐次通訳、同時通訳、放送英日時差通訳、放送英日同時通訳の訓練方法を詳述。また、日英多重ニュース同時通訳に必要な知識や勉強方法や、コミュニティ通訳についても、項を改めて紹介している。（河原）

以下、多言語通訳に関する文献もある。（河原）

【ロシア語】

- 宇多文雄・徳永晴美（1978）『ロシア語通訳読本』日本放送出版協会
- 宇多文雄・原ダリア（2007）『ロシア語通訳教本』東洋書店
- 三浦みどり・ユーラシア研究所ブックレット編集委員会（2008）『無手勝流ロシア語通訳—ジグザグ道をまっしぐら』東洋書店

【中国語】

- 武吉次朗（1984）『中国語翻訳・通訳ハンドブック』東方書店
- 塚本慶一（1987）『中国語通訳—日中通訳者への道』サイマル出版会
- ザウ イーファー（2003）『中国語＜司法通訳＞ハンドブック』明日香出版社
- 塚本慶一（2003）『中国語通訳への道』大修館書店
- 本田善彦（2006）『日・中・台 見えざる絆—中国首脳通訳のみた外交秘録』日本経済新聞社
- 呼美蘭（2006）『中国語の司法通訳—読んでわかる通訳の仕事』白帝社
- 森田靖郎（2007）『日本の中国人社会—司法通訳だけが知っている』祥伝社
- 坂東忠信（2008）『通訳捜査官』経済界
- 高田裕子・燕日（2008）『日中・中日通訳トレーニングブック』（CD 付）大修館書店
- 岩本明美（2009）『法廷の異文化と司法通訳 中国籍被告人を裁く時』風響社
- 塚本尋・張弘（2011）『中国語通訳講座 基礎編』三修社
- 坂東忠信（2012）『新・通訳捜査官』経済界

【韓国語】

- 崔愛子（2001）『韓国語通訳—ことばと心のハーモニー』東方出版
- スキ キム・國重純二（2007）『通訳／インタープリター』集英社
- ムロヤ マサフミ（2008）『韓国語＜司法通訳＞ハンドブック』（アスカカルチャー）明日香出版社
- 徐勝・小倉紀蔵（2013）『言葉のなかの日韓関係—教育・翻訳通訳・生活—』明石書店

【ベトナム語】

- チャン ティ ヒエン著・大阪大学グローバルコラボレーションセンター監修（2008）『ベトナム語 司法通訳翻訳ハンドブック』大阪大学出版会

(k) 最新情報の補足 （水野的・石原知英・河原清志）

前田華奈（2006）「教育通訳育成プログラムの作成—実践と『教育現場での通訳実態調査』の結果から」京都外国語大学大学院外国語学研究科 個人研究成果報告書

本稿は、(1) 教育通訳研修プログラムの開発と実践、(2) 教育通訳にかかわる学校関係者を対象とした質問紙調査の分析、という 2 つの課題に取り組んでいる。(1) のプログラムは、半日程度の単発講座で基礎的な内容を押さえるもので、筆者による実践が詳細に報告されている。(2) の調査からは、通訳者、学校関係者、保護者の立場の違いにより、期待される業務内容や求められるスキルに多少の齟齬があること、また各業務の困難度や勤務形態などは、学校や個人によって違いがあり、通訳者は、幅広い業務を場当たりのこなしをしているとの指摘がなされている。(石原)

篠塚勝正（2010）「文法訳読法と通訳訓練法における、TOEIC スコアの伸び率およびその脳言語科学的考察」*Seijyo English Monographs*, 42, pp. 105-131.

本稿は、学部生を対象として、文法訳読法と通訳訓練法のどちらが TOEIC スコアを伸ばすかを実証的に調査したものである。その結果、初級者（文法 20 名、通訳 20 名）と中級者（文法 16 名、通訳 30 名）の平均スコアは、ともに通訳訓練法をうけた学生のほうが伸びたと報告されている。通訳訓練法として実施したスラッシュリーディングとシャドーイングは、音声産出を伴うために認知的負荷が高く、脳の賦活度合いが高くなり、その点がスコアの上昇に寄与したのではないかと指摘されている。(石原)

南津佳広（2010）「通訳教育における訳出プロセス分析」『文学・芸術・文化』第 21 巻, 第 2 号, pp. 63-86

本稿では、英日ニュースの同時通訳から抽出した 273 例の名詞句（NP1 of NP2）の訳を分類し、それぞれの原発話から訳出までのタイムラグを計量的に分析している。その結果、訳出は 3 種（統語的対応型、意味論的固定型、語用論的調整型）に分類され、その

うち統語的対応型の想起速度が比較的遅れるとの報告がなされている。その要因として、文脈を参照して読み込む作業や、聴衆を配慮した調整が指摘されている。(石原)

長坂水晶 (2010) 「通訳養成に携わる非母語話者日本語教師のための教授法授業—通訳訓練法を扱った実践—」『国際交流基金日本語教育紀要』第 6 号, pp. 57-72.

通訳養成に携わる非母語話者日本語教師を対象に「通訳トレーニング入門」の授業を行い、通訳養成のための活動を体験・分析・考察する授業を通して、非母語話者日本語教師を対象とした研修で通訳養成のための教授法を扱う必要性と効果を確認した実践報告。(河原)

染谷泰正 (2011) 「講演録 英語教育におけるプロダクション訓練の方法論とその理論—インプットからアウトプットへの橋渡し—」『関西大学外国語学部紀要』第 5 号, pp. 93-132.

通訳者教育の中で採用されている各種プロダクション能力養成訓練のうち、(1)メモからのフルメッセージ復元訓練と、(2)ディクトグロス—この 2 点に焦点を絞り、その具体的な考え方および指導方法について、その認知的・言語的メカニズムとともに説明している。(河原)

与那覇恵子 (2011) 「大学・大学院における通訳教育：学術的・教育的領域での現状・課題・将来性」『名桜大学総合研究』第 20 号, pp. 1-15.

大学・大学院における通訳教育について、学術的及び教育的領域での過去、現在の状況に基づき、その課題と将来性を文献や日本通訳翻訳学会からの学会資料、通訳教育の被訓練者、訓練者としての筆者自身の経験を参照しながら調査・考察した論文。(河原)

甲斐榮一 (2011) 「多言語・多文化社会におけるコミュニティ通訳の現状と課題—医療通訳を中心に—」宮崎大学大学院教育学研究科学校教育支援専攻日本語支援教育専攻修士学位論文

本研究は、医療通訳の特殊性と医療通訳者に求められる能力・資質は何か、日本における医療通訳システムの現状と課題は何か、小規模点在地域における医療通訳者派遣システムのあり方、の 3 点について明らかにした修士論文。(河原)

Takahashi, K. (2012). The problems of the interpretations that were performed by untrained Japanese returnee students. *Proceedings of Sophia University Linguistic Society* 27, pp. 1-16.

通訳訓練を受けたことのない帰国子女の学生を対象にした英日逐次通訳におけるエラーや問題点を検証した論文。原発言の概要は伝わるものの脱落や微細な逸脱が観察されたという以前の研究結果をふまえ、本論文では産出のスタイルの問題に焦点を絞った。その結果、「え」「えっと」「ま」といったポーズや自己修正、同一語句の反復が頻繁に観察された。(河原)

飯野厚（2013）「英語教育におけるリスニング、シャドーイング、ディクテーションの関係」『法政大学 多摩論集』第 29 号, pp. 67-81.

本稿では、大学生 70 名を対象に、(1) シャドーイング（独自テスト）とディクテーション（CASEC Part 3）の相関分析、(2)リスニング（CASEC Part 4）に対するディクテーションとシャドーイングの重回帰分析を行っている。その結果、シャドーイングとディクテーションの間には中程度の相関（ $r = .49$ ）が見られたが、リスニングスコアへの寄与率はどちらも 7%程度であったと報告されている。（石原）

熊谷ユリヤ（2013）「通訳教育の諸相：通訳者養成から通訳訓練法による英語教育まで」『札幌大学総合論叢』第 35 号, pp. 29-42.

本稿は、日本における通訳教育の多様性を指摘するものである。日本における通訳教育実践には、主に民間学校が担うプロ通訳者の養成から、学部レベルでの通訳訓練法を応用した英語教育までの二極があるが、その両極の間にも、学生の英語力や専攻、クラスの目的等により、様々な実践が混在していると指摘されている。（石原）

鶴田知佳子（2013）「学部通訳教育一環としての、時事英語の授業」『東京外国語大学論集』第 87 号, pp. 197-214.

本稿は、時事英語を教材とした学部における語学授業の実践報告である。8 名の受講生を対象に、時事問題に関する文化的背景知識を身につけることと、自分の意見を英語で発信できることを目標とした授業が半年間展開された。ディスカッションやディベートを中心に構成された授業内容が詳細に報告されている。（石原）

特定非営利活動法人多文化共生センターきょうと（2013）「効果的な医療通訳者育成プログラムの開発とその評価 事業実施から見えた医療通訳者の育成とコーディネイト・事業運営に必要な視点」

このレポートは同センターが 2012 年度「医療通訳者育成事業委託業務」（緊急雇用創出事業臨時特例基金事業）の委託者として選定され実施した「医療通訳者育成事業」で作成した「効果的な医療通訳育成プログラムに関するレポート」を加筆・修正したもの。（河原）

飯野厚（2014）「シャドーイング訓練が英語スピーキング力とシャドーイングの認識に及ぼす効果」法政大学多摩論集編集委員会（編）『多摩論集』第 20 号, pp.105-121.

大学における英語の指導において、音読の向上のためにシャドーイングという指導技術を授業中の帯活動として取り入れ、その効果の実証を試みた。結果として、シャドーイングだけがスピーキング力の向上のための最善策と結論付けることはできなかったが、発話量の向上や発話の質において効果があること、また、学習者はシャドーイングに肯定的な認識を高め、効果感や達成感もプラスに変化させる傾向が実証できた。（河原）

越智美江 (2015) 「大学の英語共通教育における『通訳訓練法』導入—メタ言語能力向上の観点からの考察—」『松山大学言語文化研究』第 34 巻, 第 2 号, pp. 163-194.

本稿は、通訳訓練法を取り入れた語学教育の実践報告である。授業における指導の手順やタスクの種類、それぞれのタスクにおける学生の手づきや学生の内省が詳細に報告されている。学生は、タスクにおいて様々な誤訳を繰り返すのであるが、それらを通してメタ言語的な気づきを深めていくのではないかと考察されている。(石原)

吉村理一 (2015) 「通訳教育における否定表現への対応と指導法」『グローバル人材育成教育研究』第 2 巻, 第 2 号, 頁数不明

本稿は、学部における通訳教育実践の中で学生が示す誤訳のうち、否定表現に関わるものに焦点を当てて分析を行っている。rarely を伴う文や否定倒置の表現が、学生の訳出では一律に「～ない」の形であることが示され、その要因として、認知的負荷軽減のための方略に加え、文法知識の欠如があるのではないかと指摘されている。(石原)

熊谷ユリヤ (2016) 「様々なレベルの通訳コースにおける同時通訳の導入と訓練」『札幌大学総合論叢』第 41 号, pp. 17-33.

本稿は、同時通訳の訓練を逐次通訳の訓練と並行して取り入れた通訳指導実践についての報告である。比較的早期に同時通訳の入門的内容を導入することで、履修者の動機づけが高まるのではないかと指摘されている。(石原)

中村昌弘・奥村キャサリン・田辺希久子 (2016) 『踏み出せ！通訳・翻訳の世界』大阪教育図書

「通訳はことばのデザイン」「翻訳はある種の言い換え」という標語のもと、通訳・翻訳の初学者向けに、(1) 通訳・翻訳の基本を概説する INTRODUCTION、(2) 実践課題を収録した Lesson パートの 2 部構成を取った、入門書である。通訳・翻訳とも (2) で 10 題の練習問題がついている。(河原)

* * *

【寄稿者紹介】掲載順 (2013 年秋現在)

鳥飼玖美子 (立教大学大学院)	水野的 (青山学院大学)	南津佳広 (長崎外国語大学)
長沼美香子 (東京大学大学院)	西村友美 (京都橘大学)	友野百枝 (大阪女学院大学)
宮元友之 (大阪女学院大学)	中村幸子 (愛知学院大学)	稲生衣代 (青山学院大学)
新崎隆子 (東京外国語大学)	山本一晴 (大阪大学)	内藤稔 (東京外国語大学)
渡部富栄 (大東文化大学)	篠塚勝正 (成城大学大学院)	田中深雪 (大東文化大学)
高橋絹子 (上智大学短期大学部)	河原清志 (金城学院大学)	※石原知英 (愛知大学)